

<p>日本建築学会北海道支部 2014 年度 通常総会</p>

日時 2014 年 5 月 16 日 (金)
会場 北海道建設会館

日本建築学会北海道支部

日本建築学会北海道支部 2013 年度総会議案

I 2013 年度事業報告

9年ぶりの日本建築学会北海道大会を支部メンバー一丸となって準備・運営に当たり、8月30日～9月1日の3日間、北海道大学にて盛況の内に終了。無事、次期大会開催予定の近畿支部へ学会旗を渡すことができた。これもひとえに1年間を掛けての準備作業にボランティア精神で献身頂いた会員各位の力と和の賜である。特筆すべきことは、今大会の準備・運営の経験を通して得たノウ・ハウ及び改善すべき問題点を各担当部会から詳細に洗い出してもらい、今後の大会運営改善に向けて、「2013年度北海道大会において発生した問題点と申し送り事項」として本部理事會に提出し、本部学術推進委員会内に「大会のあり方タスクフォース」を立ち上げ検討がなされたことである。大会はこれまで、本部サポートは受けつつも支部の一大事業とし支部主体で行われてきた。これが支部活動の活動資金となる得点もある反面、過剰な労役負担も覚悟する必要がある。学会全体で大会事業を運営するシステムを訴え、その方向性を本部が継続検討することとなった意義は大きいと判断する。

今年度に特化した事業として、日本建築学会が一般社団法人へと移行したことに伴う支部規定の改定があり、2013年5月10日総会にて承認された。建築学会の一般規則改定に伴う形式上の変更点为主だったところであるが、情報回覧の正確性と迅速性の観点から支部役員会（旧支部常議員会）の構成員に支部各委員会委員長またはその代理人を支部長の要請により出席し意見を述べることが可能となった。

今年度の取り組みとして、通常業務に加え以下の5項目が重点課題として掲げられ、常議員を中心としたワーキンググループにて検討され、以下のように報告されている。

- (1) 各委員会（特定課題研究委員会・期限付き委員会を含む）の活動の活発化及び透明性の向上
 - ・各委員会の活動性を支部ホームページ（以下、HPと略称。）上にアップすることを検討する。
 - ・別事報告・各議事録・委員会配布資料のHP上へのアップを検討する。
 - ・そのためのHP更新定型フォーマットをHP編集委員会において準備検討する。
 - ・各委員会資料のPDF化と委員以外の支部メンバーで希望者には、PDF資料の配付を検討する。
- (2) 支部若手会員の活躍の場の創設
 - ・支部研究会等の司会を若手（特に大学院生）に担当してもらうことを検討したが、時期尚早という結論に達した。
 - ・発表・コンペの場の拡大を意図し、若手研究者による企業のパネル展示発表会を支部研究発表会で2014年より試行する。
 - ・各常設委員会等への若手研究者（大学院生を含む）の参画の可能性を検討する。
- (3) 各賞選考委員の選定方法の透明化
 - ・担当委員から経緯等の確認をおこなった。さらに、各賞選考委員名や同内規、表彰規定ならびに過去の受賞作の審査経緯もあわせて支部ホームページにおいて公開されていることを確認した。
- (4) 支部ホームページの利用促進・活用方法の検討
 - ・扱いの容易さと経費の観点から本部サーバーと切り離し、独自のサーバーを立ち上げることを検討し、2014年度より移行手続きに入ることを決定。
 - ・学会本部サーバーへの各種要望（ブログツールの導入等）を支部長会議へ提出した。
- (5) 支部作品発表会・論文発表会の一般公開の可能性検討
 - ・一般住民へ北海道支部の存在をアピールすること、そして北海道住民の建築リテラシー向上を目的として、支部建築作品発表会の一般公開をより強くPRすることを検討する。

昨年度より当該支部の中心課題として取り組んできたことは、支部運営の透明性である。上記項目はそのことを意識しての、具体的検討課題である。それというのも、学会組織が2012年に一般社団法人へと移行したことによる複雑さと相まって、会員には日本建築学会の本部事業と支部事業の中身・違いが分かりにくくなってきていた様に思われる。それが学会との距離感を作り、

会員においては活動に積極的に取り組む動機を阻害し、また、北海道地域内での会員外に対する建築学会の存在感を訴える力が弱まってきているように思われる。その改善策の1つとして、学会理事会・支部役員会・各委員会等々の活動を学会ホームページや会員へのメール等を使い、情報発信及び意見収集に努めてきた。そして地方の意見として中央へ具申してきた。ある程度の形はできつつあるものの、まだまだ不十分な点も多く、次年度以降への反省点として次期支部長へ申し送りしていきたい。

若手会員増加は学会本部からの課題でもあり、北海道支部はその一環として2011年度より支部研究発表会の若手発表者を顕彰する目的で「日本建築学会北海道支部研究発表会優秀講演奨励賞」を設立し、今回で3回目となる。今年度は10名が表彰された。若手発表顕彰については、本部学術推進委員会においてもその利害得失について検討中であり、数々の問題点（質問に対してシニアの共著者が回答すると候補対象者にマイナスイメージが与えられることから共著者が遠慮し、本来の学術的討論が阻害される恐れがある。また、表彰学生に対してそれ以外の付加価値が与えられることもあり、本来の表彰目的からはずれる等々）も指摘されているところではあるが、本支部においては学生奮起の一役ともなっており根付きつつある。また、企業の若手会員の積極参加を誘発すべく、支部研究発表会において、企業のパネル発表を検討中であり、2014年度からの試行を準備中である。

それ以外の主立った活動を記載する。第86回支部研究発表会が6月29日に北海道工業大学（現・北海道科学大学）において開催された。発表題数は126題、参加者は約170名で活発な議論がなされた。これに合わせ同大学とも関係の深い川口衛氏（現・川口衛構造設計事務所主宰）による「雪と大空間構造」と題した特別講演がなされた。

表彰関係では、北海道建築賞は今回で第38回を数え建築賞2点（佐藤孝氏：「北海道工業大学体育館"HIT ARENA"」の設計、五十嵐淳氏：「repository」の設計）と奨励賞1点（石塚和彦氏：「SPROUT」の設計）の表彰を行った。本賞は北海道の建築文化を育て、市民の建築への関心を高める一定の役割を果たしてきている。北海道支部技術賞は昨年より表彰対象を建築文化の継承に尽力された会員外の工匠にも光を当て、学会と支部の存在をアピールする意図を拡大したが、残念ながら今年は該当なしとなった。

1. 支部運営の諸会合の開催

◆ 総会

期日 2013年5月10日

会場 北海道建設会館

出席正会員 62名（委任状 32通）

当支部地域在住正会員894名の30分の1、29名以上の出席により成立

2012年度事業報告及び収支決算、ならびに2013年度事業計画方針案及び予算案を審議し、異議なく可決承認された。

◆ 常議員会

7回開催(通信常議員会含)

◆ 常任幹事会

5回開催

◆ 選挙管理委員会

1回開催

2. 学術系委員会の活動

2. 1 学術委員会（主査：佐藤 孝君，委員数：14名，委員会開催数：4回）

本委員会では、本部学術推進委員会の情報を各専門委員会および研究委員会に伝達するとともに、各専門委員会・研究委員会から企画及び活動の報告を受けた。また、支部研究発表会実行委員会の企画の審議と承認、特色ある支部活動企画の申請、特定課題研究の推薦、建築文化週間事業企画および道内工業高校巡回講演会講師派遣について議論し決定した。

また、北海道支部技術賞の募集と選考を行った。

(1)研究助成

支部特定課題研究委員会

- ・ 寒冷地におけるフライアッシュの有効利用研究委員会（主査 深瀬孝之）2013-14
- ・ 奥尻島生活再建研究委員会（主査 南 慎一）2012-13（終了）
- ・ 厳冬期被災を想定した避難所運営手法に関する研究委員会（主査 森 太郎）2012-13（終了）

本部助成

- ・ 建築史意匠研究委員会（主査 羽深 久夫）2013-14

特色ある支部活動

- ・ 大雪による建築物倒壊危険度判定方法の策定研究（主査 草苺敏雄）2013-14

(2)道内工業高校巡回講演会講師派遣について

・派遣について、2014年度は、苫小牧工業高校は構造専門委員会、小樽工業高校は環境工学専門委員会となった。

- ・ 2015年度：室蘭工業高校は都市計画専門委員会、名寄産業高校は北方系住宅専門委員会
- ・ 2016年度：札幌工業高校は材料施工専門委員会、函館工業高校は建築計画専門委員会
- ・ 2017年度：歴史意匠専門委員会、都市防災専門委員会

(3)北海道支部技術賞選考委員会

・本年度支部技術賞は、2件の応募があった。技術賞選考委員会を開催し、議論、採決の結果、今回は「受賞候補者の対象なし」とした。その理由と結果を常議員会に報告した。

2. 2 専門委員会の活動

◆ 材料施工専門委員会（主査：長谷川拓哉君，委員数：22名，委員会開催数：5回）

2013年度は、専門委員会を2ヶ月に1回程度の割合で、計5回開催した。委員会では、本部材料施工本委員会など各種委員会報告や諮問事項について検討し、材料・施工に関する情報や意見の交換を行った。また、興味ある話題や今日的な話題について事前に担当者を決め報告をしていただき、最近の研究動向について意見の交換を行った。2013年6月24日（月）に「創価学会室蘭文化会館新築工事現場」、9月17日（火）に「(仮称)札幌三井JPビルディング新築工事」の現場見学会を構造専門委員会と共催で行った。

◆ 構造専門委員会（主査：溝口 光男君，委員数：19名，委員会開催数：2回）

委員会の主な活動は次のとおり。

1) 構成委員数 19名

2) 委員会開催

6月28日と12月18日の2回，都市防災専門委員会と合同で開催。

3) 講演会

10月28日，「鵜飼邦夫氏（㈱構造地盤研究所）の講演会「建築の構造を設計することとは」を鉄鋼連盟・JSCA支部と共催。90名参加。

4) 見学会（材料施工専門委員会と合同）

6月24日，創価学会室蘭文化会館新築工事の現場見学。26名参加。

9月17日，(仮称)札幌三井JPビルディング新築工事の現場見学。25名参加。

5) 工業高校巡回講演会の講師推薦 長谷川圭一氏：1月22日，釧路工業高校

6) 勉強会

6月28日，岡田先生を講師として「東海圏における地震防災対策」を実施。

7) その他

9月2日、構造デザイン探訪ツアーを大会（北海道）実行委員会、JSCA支部と共催。20名参加。

2月15日、ワークショップ「アイスカテナリーシェルを作ろう！」実施。14名（内学生11名）参加。

◆ **環境工学専門委員会**（主査：齊藤 雅也君，委員数：14名，委員会開催数：4回）

- 1) 2013年度北海道大会 環境工学本委員会主催の研究協議会「異分野からの視点を活かす建築環境工学—人材育成と地域課題解決に向けた連携のすがた—」を企画・実施した（2013年8月31日@北海道大学、参加150名）。
- 2) 2013年度大会（北海道大学）行事：市民セミナー「性能向上と住まいのこれから」を支援した（日本建築学会住まい・まちづくり支援会議+北海道住まいづくり市民セミナー主催、2013年9月2日@北大百年記念会館、参加100名）を支援した。
- 3) 第2回委員会にて、若手研究者（村田さやか委員（北総研））の研究発表の機会を設け、最新の研究動向を把握した（2013年10月18日@札幌市立大学サテライトキャンパス）。
- 4) 北方系住宅委員会と共催で、「見学会：ニセコ町営住宅（これからの住まいと暮らしを考える）」を企画・実施した（2013年11月2日@ニセコ町）。
- 5) 道内工業高等学校講演会で魚住委員（北海道工業大学）を北海道留萌千望高等学校派遣した「建築における自然エネルギー利用～太陽光・風・雪…」（2013年11月18日）。
- 6) 「COC市民講座：地球環境時代の北国の住まいを考える—省エネルギー法の改正をきっかけとして—」（札幌市立大学・北海道立総合研究機構 主催）の開催を支援した（2013年2月20日@札幌市立大学サテライトキャンパス、参加53名）
- 7) 「北方型住宅ワークショップ：寒冷地の住宅の換気と暖房を考える—省エネ基準改正をきっかけとして—」を主催した（2013年2月20日@札幌市立大学サテライトキャンパス、参加45名）。
- 8) 「第8回環境工学系・卒業論文発表会 EGGs' 13」を開催した。また特別企画として、阿部佑平氏（北海道立総合研究機構 北方建築総合研究所）の講演会を開催した（2014年3月7日@札幌市立大学サテライトキャンパス、全25題、参加51名）。
- 9) 空気調和・衛生工学会北海道支部主催 地区講演会「寒冷地における給湯システムの現在と未来のすがた」（2014年1月27日@札幌市立大学サテライトキャンパス、参加50名）を支援した。
- 10) 市民シンポジウム「あなたの住環境と健康・安全を考える」（2014年3月14日、北海道大学工学部B31 教室にて開催、参加70名）の開催を支援した。
- 11) 本部の建築設備運営委員会と合同委員会を開催（2014年3月16日@北海道大学・学术交流会館）、その翌日に「見学会：石狩データセンター（2014年3月17日開催）」を実施した

◆ **建築計画専門委員会**（主査：森 傑君，委員数：12名，委員会開催数：2回，WG開催数5回）

本年度も昨年度から継続して、これまでの活動実績を踏まえつつ、今後もより精力的な学術活動および社会貢献活動を展開すべく、若手を中心としたメンバー構成のもと再活性化に取り組んだ。具体的には、2013年度北海道大会における建築計画部門の研究集会として、当委員会から提案したパネルディスカッション「そこへ住まうことの意味～住まいと住まい方、その選択の現代性～」を開催した。また、「(仮) 30年後の北海道の生活と住まい」をテーマとした書籍出版に関するWGを設置し、2014年度内発行へ向けて準備を行った。

◆ **都市計画専門委員会**（主査：坂井 文君，委員数：14名，委員会開催数：5回）

都市計画委員会は、8月に公開シンポジウム「路面電車からはじまるまちづくり～点（個人）から線（電車）、そして面（まち）へ」を開催し、3名のプレゼンターと48名の参加者によって、札幌市の路面電車のループ化の影響をまちづくりの観点から議論した。また1月には、北海道の地方都市をめぐる都市計画の現状と課題についての意見交換が昨年度に引き続き企画され、今年度は千歳市の都市計画の動向について現場の報告につづき、景観やまちづくりに関わる都市計画の課題について議論した。例年恒例となりつつあるシンポと研究会の議論をもとに調査として展開する研究計画などについて議論を継続的に行った。

◆ **歴史意匠専門委員会**（主査：羽深 久夫君，委員数：17名，委員会開催数：4回）

道内各地域の歴史的建造物の現状を把握することに努め、保存・活用等に関して委員相互の情報交換を行ない、必要に応じて学会として社会や住民に発言する活動を行った。

- ①大会にあわせて、支部専門委員会として豊平館耐震補強現場見学会(8/31)と建築歴史・意匠本委員会として建築史・意匠系研究者交流懇親会を開催した(8/31 テラスレストラン・キタラ)。
- ②建築文化週間事業は「建築散歩～豊平館を見て楽しむ」をテーマに国重要文化財豊平館保存修理工事の見学を行った(10/12、参加者34名)。
- ③北海道内の文化財建造物については、WGで函館市、札幌市、小樽市、旭川市、帯広市の事例をもとに検討を行い、委員によるリストづくり、パトロール、カルテ・報告書づくり、修理工事等の予算要求を行う一連のシステムづくりと市民団体と連携した実施体制やヘリテイジマネージャー養成体制を急ぎ整備するよう努めることを確認した。
- ④帯広市の文化財建造物の見学を行い、国登録有形文化財の双葉幼稚園、市指定有形文化財十勝監獄石油庫、宮本商産(株)旧社屋、旧三井金物店、中小路形式の飲食街を調査した。

◆ **北方系住宅専門委員会**（主査：谷口 尚弘君，委員数：13名，委員会開催数：4回）

- 1)2013年大会時に関連行事として「住まいづくり市民セミナー」(9月2日)を開催し、報告書を作成した。
- 2)上記1)にて作成した報告書のなかの「北海道の住まいの歩み」について、報告書等にまとめるための協議を実施した。
- 3)北海道におけるこれまでの「集合住宅」の変遷について勉強会を実施した。
- 4)新たな地域住宅像の検討に向けて住宅見学会・意見交換会をニセコ町にて開催した。
- 5)住宅ストックの持続的活用による北海道の住文化の形成に資するために、昨年度まで支部特定課題で採択されていた「三角屋根コンクリートブロック住宅の持続可能住居について」の研究を継続して実施した。

◆ **都市防災専門委員会**（主査：戸松 誠君，委員数：19名，委員会開催数：2回，通信委員会開催数：4回）

都市防災専門委員会では、10月5日に新ひだか町で開催された建築文化週間「地震防災体験学習 in ひだか」への運営協力支援、12月7日～8日に開催された「釧路高専における避難所研修」に対する協力を行い、一般住民の防災意識向上や地域の防災力向上に対する支援活動を行った。また、本部災害委員会からの災害情報に関して、委員会内部に周知し情報の共有を図った。

2. 3 特定課題研究委員会の実施

(2012年度より)

◆ **奥尻島生活再建研究委員会**（主査：南 慎一君，委員数：9名，委員会開催数：2回）

奥尻島の津波災害からの生活再建過程について文献資料調査を行い、居住地の選定及び住宅建設時期の要因を把握した。住民の生活行動・意識の変容について聞き取り調査及びアンケート調査を行い、災害復興計画の影響要因を把握した。また、建築学会北海道大会記念シンポジウムに係る奥尻島災害復興関係者の聞き取り調査を行い、20年間の生活再建過程を踏まえた今後のまちづくりの課題について把握した。

◆ **厳冬期被災を想定した避難所運営手法に関する研究委員会**（主査：森 太郎君，委員数：6名，委員会開催数：13回）

本年度は委員会メンバーが中心となり札幌市から受託研究を実施
研究報告は北海道支部研究報告会、札幌市受託研究報告書として行う予定
1.10/10 音更町 避難所運営研修を実施：ハザードを洪水で実施

- 2.10/15 浦幌町 避難所運営研修を実施：北海道防災モデル事業
- 3.11/20 白老町 避難所運営研修を実施：議員対象研修
- 4.11/25 手稲区 札幌市基幹避難所研修に講師として参加
- 5.12/7 釧路市 宿泊を伴う冬期防災訓練，防災減災機構，宮下氏に講評を依頼
- 6.12/13 清田区 札幌市基幹避難所研修に講師として参加
- 7.1/9 南区 札幌市基幹避難所研修に講師として参加
- 8.1/14 中央区 札幌市基幹避難所研修に講師として参加
- 9.1/16 東区 札幌市基幹避難所研修に講師として参加
- 10.1/20 北区 札幌市基幹避難所研修に講師として参加
- 11.2/25 足寄町 避難所運営研修を実施：町民対象研修
- 12.2/8-9 帯広市 厳冬期防災訓練にて採暖室の温度，炭酸ガス濃度測定を実施
- 13.2/28-3/1 札幌市 暖房機のない体育館における避難所の温熱環境測定を実施

(2013 年度より)

◆寒冷地におけるフライアッシュの有効利用研究委員会（主査：深瀬 孝之君，委員数：16 名，委員会開催数：5 回）

本委員会は、学術研究機関、設計事務所、建設会社、生コン工場に所属する委員 16 名で構成し、2013 年度は委員会を計 5 回開催した。2 年間の活動期間において、北海道におけるフライアッシュの有効利用を促進させるため、フライアッシュに関する利用者の認識や利用状況を把握することを目的としたアンケート調査を実施し、その課題解決に向けた活動を行う。

本年度は、アンケート調査の実施内容について検討し、2014 年 1 月に北海道内に所在する発注機関、構造設計事務所、建設会社、生コン工場、コンクリート製品工場を対象としたアンケート調査を実施した。（配布数 148、回答数 82、回収率 55%）

なお、アンケート調査の結果は 2014 年 6 月の北海道支部研究発表会で報告する予定である。

2. 4 本部からの支部助成金による研究委員会の実施

(2013 年度より)

◆建築史意匠研究委員会（主査：羽深 久夫君，委員数：16 名，委員会開催数：4 回）

「北海道における戦後建築の変遷とその特徴に関する基礎的研究」をテーマとして、戦後の北海道で建設された建築の変遷とその特徴を把握するため、各地に遺存する当該建築の残存状況を悉皆的に調査し、今後の調査・分析の基礎データを構築することを目的として、1 年目の調査研究を行った。調査研究内容は支部研究発表会において報告する。

①戦後建築のリスト作成

『北海道の建築 1863-1974』、『北方建築 1~5 巻』、『新建築』、太田実作品集、戦後写真集、1953 札幌のまちなみ・建築士会会報、事務所協会作品集、DVD、学会作品発表会リスト等を資料として、（旧）札幌市民会館における「いかに札幌が遠く北海道が未知の世界か」や稲垣栄三氏の「戦後建築は戦前の焼き写しと考えていた立場を変えなければいけない」という言説を踏まえ、戦後建築特有の動向の把握を目的とした。対象とする年代は資料の編集年代ごとに通観し、一律の下限の年代を設けないこと、対象地域・選定基準は資料掲載物件によるが、道内主要地域の漏れがないように留意して、資料掲載時の選定基準を尊重すること、資料に記載された景観や都市計画・地域計画の範疇にあるものも対象とすることとした。

②確認調査

『北海道の建築 1863-1974』（丸善、1974）掲載作品 178 件（写真付物件）、『北方建築』1957 年から 1960 年までの掲載作品 50 件の計 228 件をリスト化した。リスト作成の際の項目は、①竣工年、②作品名称、③設計者、④施主、⑤所在地、⑥建築用途・種別、⑦施工者、⑧構造（主構造・一部）、⑨面積（敷地・建築・延床）、⑩外部仕上げ（屋根・外壁・柱・梁）、⑪総工費、⑫階層、⑬設備、⑭発表媒体、⑮工期、⑯現存の 16 項目とした。リストのうち、旭川市、釧路市、北見市、苫小牧市、登別市、室蘭市、石狩市、江別市、岩見沢市、美唄市、帯広市、札幌市郊外の現存・非現存の確認調査を行った。

2. 5 特色ある支部活動の実施

◆大雪による建物倒壊危険度判定方法の策定（草苺 敏夫君，委員数：7名，委員会開催数：4回）

2011年12月中旬から2012年2月に掛けての大雪により発生した建物被害に関して、被害状況の把握に務め、被害パターンの整理と原因について検討を行った。被害原因に関しては、構造的な面、気象環境面、使用環境面、積雪荷重等から検討を加え、危険度判定項目の整理に結びつけた。危険度判定方法の策定においては、後志地域が行っている廃屋・空き家対策モデル条例を参考に、他の耐震診断基準類や指針類との整合性を取り、切迫的危険度と経時的危険度の両面に関して検討し、危険度の判定項目や判定方法、判定の流れについて整理した。同時に、webカメラを活用した積雪による建物倒壊警報システム構築の考案や常微動計測による危険度判定などに関しても検討しており、今後の研究へと繋げている。また、本委員会の活動に関しては、道内市町村や振興局の建築関係職員を対象にした講演会において報告を行っており、今後増加が予想される空き家や空き建物に関する対策を考える上での一助となることを期待している。

3. 委託調査研究の受託

なし

4. 支部研究発表会の実施（主査：森 太郎君，実行委員会委員数：16名，委員会開催数3回）

4. 1 開催要領

日本建築学会北海道支部 第86回研究発表会

日時：2013年6月29日（土）

場所：北海道工業大学（札幌市）

参加者：約170名

4. 2 実行委員会

①実行委員会委員 [主査]森，[幹事]前田，[構造]千葉，植松 [材料施工]谷口，金森，[環境工学]湯川，岸本，[建築計画]野村，石橋，[都市計画]久保，片山，[歴史意匠]角，原， [北方住宅]照井，谷口，[防災]高井，竹内，[事務局]菊地

②実行委員会開催回数3回（第1回1月メール審議，第2回2月メール審議，第3回プロ編4/22）

③実行委員会スケジュール

11月末日：建築雑誌入稿、1月：第1回実行委員会メール審議、2月：第2回実行委員会メール審議、1月：建築雑誌会告、2月下旬：HP作成、3月上旬：HP原稿募集、4/18：原稿締め切り、4/26：第3回実行委員会プロ編、5月上旬プロ編校正、5月中旬：CD印刷入稿、6月中旬：CD発送、6/29：支部研究発表会

4. 3 研究発表会

論文総数 126題

優秀講演奨励賞（HPにて公表）

材料施工：鳴海玲子君 室蘭工業大学大学院

構造： 岡聖也君 室蘭工業大学大学院

石井建君 北海道大学大学院

伊藤智明君 北海道大学大学院
環境工学：安田聖君 室蘭工業大学
徳田彩佳君 北海道大学大学院
大泉翔平君 北海道大学大学院
建築計画：黒坂泰弘君 北海道大学大学院
小松真紀君 北海道大学大学院
歴史意匠：三好花保君 北海道大学大学院

4. 4 特別企画：「雪と大空間構造」

講師：川口 衛（川口衛構造設計事務所主宰）
会場：北海道工業大学5号館1階 5106
挨拶：岡田成幸（北海道大学）
司会：前田憲太郎（北海道工業大学）
記録：大西直毅（北海道大学）
参加者：約150名

4. 5 懇親会

日時：6/29（土）18:00～19:30
場所：北海道工業大学食堂 会費：一般3000円，学生2000円
参加者：78名

5. 表彰

5. 1 北海道建築賞

(1) 北海道建築賞委員会（主査：小篠 隆生君 委員7名 委員会開催数3回現地審査3回）

本委員会は1975年、北海道支部に表彰制度が設けられて以来、道内に建設された建築（アーバン・デザイン等の領域も含む）の中から本賞・特別賞・奨励賞に相応しい作品を選考し、2013年度で38回目となった。選考の基準としては、作品の有する「先進性」、「規範性」および「洗練度」の視点を掲げている。

今年度は、4月15日（月）の応募開始から11月1日（金）の表彰式および受賞記念講演会まで、以下に示す一連の活動を通して第38回北海道建築賞を実施することができた。

- 5月9日（木）： 第1回委員会 応募状況の確認および応募推薦作品の選定、審査方法・スケジュールの確認。
- 5月31日（金）： 第1回審査会 応募14作品が審査対象作品となることを確認。書類審査で現地審査対象作品8作品を選考。
- 6月30日（日）： 第1回現地審査
「ATMN」（札幌市）、「SPROUT」（札幌市）
- 7月16日（火）： 第2回現地審査
「北海道工業大学体育館“HIT ARENA”」（札幌市）、「苫小牧信用金庫まちなか交流館」（苫小牧市）
- 8月17～18日（土、日）： 第3回現地審査
「repository」（当麻町）、「稚内駅前地区市街地再開発 ～キタカラ・JR稚内駅・北緑地トイレ～」（稚内市）、「津別町多目的活動センター「さんさん館」」（津別町）
- 8月21日（水）： 第2回審査会 最終選考を行い以下の結果となった。
- ・北海道建築賞 「北海道工業大学体育館“HIT ARENA”
（佐藤孝君／北海道工業大学）
 - ・同 上 「repository」（五十嵐淳君／五十嵐淳建築

設計事務所)

- ・北海道建築奨励賞 「SPROUT」(石塚和彦君/石塚和彦アトリエ
一級建築士事務所)

11月1日(金):

北海道大学遠友学舎にて授賞式および受賞記念講演会が開催され、設計者自身による授賞作品のコンセプト構築から設計プログラムへの展開、さらにその実施プロセスについて詳しく解説された。また、その後、記念パネルディスカッションが開催され、建築賞委員会のコーディネートで3授賞者ととも、建築への取り組み姿勢、地域における公共施設のあり方、場所(地域・気候)への認識、素材とディテール表現などについて、来場者からの質問も含めて議論された。授賞作品を通じて、現代の北海道における建築を取り囲む言説や課題などに通じる深く語り合うことができ、建築文化週間の行事としても有意義な建築文化の醸成ができた。

審査員:

主査:小篠 隆生君

委員:加藤 誠君, 久保田 克己君, 齋藤 利明君, 鈴木 敏司君, 平尾 稔幸君
山田 深君

(2) 受賞者

◆北海道建築賞

佐藤 孝君(北海道工業大学)

作品名—「北海道工業大学体育館 “HIT ARENA”」の設計

◆北海道建築賞

五十嵐 淳君(株式会社五十嵐淳建築設計事務所)

作品名—「repository」の設計

◆北海道建築奨励賞

石塚 和彦君(石塚和彦アトリエ一級建築士事務所)

作品名—「SPROUT」の設計

(3) 審査経緯

今年度の北海道建築賞委員会は、2013年5月9日、札幌市内で2013年度の第1回委員会を開催した。今年度の審査方法を審議し、北海道建築賞の主旨に沿った建築へのまなざしと応募作品に対する審査方法を委員全員で確認した。その後、応募状況を検討し、委員の中で注目に値する作品を「2012北海道建築作品発表会」や他の発表作品などの情報をもとに議論し、その中から委員からの応募推薦対象作品として7作品を選び、各設計者に正式な応募手続きを依頼した。第1回の審査委員会は、5月31日に開催され、応募作品が7点に前述の7作品を加えた計14作品を今年度の審査対象作品とした。

応募作品及び応募設計者(応募順):

- ① 空 水 住まい(ヨシダオサム君、早川未紗君/Atelier Monogoto 一級建築士事務所)
- ② 赤川保育園(山田俊幸君/山田総合設計(株))
- ③ 一正蒲鉾(株) 新北海道工場(下村真一君、古市理君、宮本晃代君/大成建設(株) 一級建築士事務所)
- ④ 砂川市立病院(福島祐二君、北原和俊君、藤原益三君、近藤彰宏君、小川孝君/(株)大建設設計医療事業部、(株)大建設札幌事務所、(株)日建設計、(株)北海道日建設計)
- ⑤ 札幌麻生脳神経外科病院(飯田満君/(株)サン設計事務所)
- ⑥ 新十津川中学校武道場(山本正則君、小野寺和久君/(株)北海道建築総合研究所)
- ⑦ 稚内駅前地区市街地再開発 ~キタカラ・JR 稚内駅・北緑地トイレ~(小谷陽次郎君、加納美佐恵君/(株)日建設計、(株)北海道日建設計)
- ⑧ 苫小牧信用金庫まちなか交流館(山脇克彦君、小谷卓司君、大門浩之君/(株)日建設計、(株)北海道日建設計構造設計室、(株)北海道日建設計設計室)
- ⑨ ATMN(大坂美保子君、大坂崇徳君/アーキラボ・ティアンドエム)
- ⑩ SPROUT(石塚和彦君/石塚和彦アトリエ一級建築士事務所)
- ⑪ 津別町多目的活動センター「さんさん館」(井端明男君/(株)アトリエアク)
- ⑫ 北海道工業大学体育館 “HIT ARENA”(佐藤孝君、芳川朝彦君、種田俊二君(北海道工業大学、

a-plus 芳川朝彦建築設計室、清水建設（株）一級建築士事務所

⑬ 円山の家（佐野天彦君／アトリエサノ）

⑭ repository（五十嵐淳君、五十嵐淳建築設計事務所） 以上、応募順

審査における評価の視点として、これまでの選考の視点を崩さずに、計画理論や設計・デザインに対しての新しい挑戦や問題意識、新しい生活・環境の構築を目指した意欲と新たなビジョンの構築に対する「先進性」、自然、環境、人間社会総体を含めた時間的、空間的「規範性」、それらを実現・統合して建築としての高い質を確保することを目指す「洗練度」の3項目を共通価値とすることを最初に確認した。その後、現地審査対象作品を選定する書類審査に移った。応募資料の内容を丁寧にトレースし、議論を重ねた末に、現地審査該当作品（順不同）として以下の8作品、⑦稚内駅前地区市街地再開発 ～キタカラ・JR 稚内駅・北緑地トイレ～、⑧苫小牧信用金庫まちなか交流館、⑨ATMN、⑩SPROUT、⑪津別町多目的活動センター「さんさん館」、⑫北海道工業大学体育館”HIT ARENA”、⑬円山の家、⑭repository が選定された。しかし、この後、現地審査が不可能であることが判明した⑬円山の家は、応募設計者の了解のもと、審査対象から外し、7作品を現地審査該当作品とした。

現地審査は、委員7名の全員の参加を原則に3回に分けて実施された。6月30日に⑨ATMN、⑩SPROUT、7月16日に⑫北海道工業大学体育館”HIT ARENA”、⑧苫小牧信用金庫まちなか交流館、8月17～18日に⑦稚内駅前地区市街地再開発 ～キタカラ・JR 稚内駅・北緑地トイレ～、⑪津別町多目的活動センター「さんさん館」、⑭repository の審査を周辺環境から建築空間の内外まで詳細な観察と、設計者やクライアントからの説明や質疑などを行った。

最終審査会は、8月21日、札幌市内で開催され、現地審査作品を対象に最終選考が行われた。選考審査は、各委員が各作品に対する見解を述べたのち、候補作品の設計者と同一の組織に所属する委員がその後の選考から外れ、候補作品全体について議論、さらには、個々の作品の評価と意義が整理され、長い討議になった。その選考過程で、7作品よりまず、⑧苫小牧信用金庫まちなか交流館、⑨ATMN が選考対象から外れ、5作品に絞られた。その上で、各作品に対して評価と意義がもう一度整理された。大多数の委員から今年度は、全体的にレベルの高い作品が揃っているとの評価があり、北海道建築賞、同奨励賞の双方の選考を同時に進める中で、本賞には届かないが、建築奨励賞としての基準を十分満たしているとの評価より、⑩SPROUT を本年度の北海道建築奨励賞とした。その後、残りの4作品に対しての北海道建築賞の選考に入り、各委員より再度評価を行った。その結果、⑦稚内駅前地区市街地再開発 ～キタカラ・JR 稚内駅・北緑地トイレ～、⑪津別町多目的活動センター「さんさん館」が選考対象から外れた。そして、再度それぞれの作品の評価と意義の整理がなされ、最終的に委員全員の合意によって⑫北海道工業大学体育館”HIT ARENA”と⑭repository を本年度の北海道建築賞とした。

「北海道工業大学体育館”HIT ARENA”」は、大学の福利厚生施設という性格を体育館という建築空間に十分に持ち込み、学生たちが様々な目的で集まり、溜まる広場空間を建築で構成している。このことが、ついつい機能優先でステレオタイプ化してしまう大学の運動施設を大学キャンパスの中でのアクティビティを受け入れる受容器として、建築に魅力的な空間を与えたという計画的先進性と、温熱環境的に不利にあるアリーナをペリメーター側に小部屋や外皮を重ねることでエネルギーロスを減じつつ、大きなエネルギーコストをかけずに、良好な室内環境を達成していることは、北海道の建築としての規範性、洗練度を併せ持ち、北海道建築賞として高く評価できる。

「repository」は、北海道の気候に対する住宅のあり方という普遍的なテーマを空間の構成と温熱環境、さらにそれらに呼応した住まい方の提案に翻訳し、高い次元でのデザインにまとめ上げた作者の力量が大いに評価された。吹きさらしの田園地帯に屹立する田園住宅に対して、その気候を防御するために、外皮と小部屋で外周を取り囲み、その中はほぼワンルームという構成で、リーズナブルな温熱環境を構築すると同時に、トップライトから降り注ぐ光は、その量から外部を感じさせるほどの明るさを持つ。作者が、ずっと追いかけて来たワンルーム形式の居住形態は、内部に絵画的な風景をもたらす、極限にまで削ぎ落とされた薄い額縁のような大きな開口を持つ壁によって、ゆるやかに仕切られている。住環境としての性能を十分確保するという規範的命題を達成した上で、奥行きやスケールを自在に操作し、実際の大きさ以上の感覚をもたらすデザイン力は、住宅としての枠を大きく超えた先進的なデザインとして高く評価でき、北海道建築賞に値する作品である。

「SPROUT」は、施主との十分な協議によって彼らが目指すライフスタイルを狭小な敷地条件やコストなどの制約といった現実的な問題を乗り越えながら、住宅空間として特徴的な重層的空間をデザインしていくという作者の建築に対する真摯で、丁寧な対応とその構成員に好感が持てる。人が暮らしていくために必要な、人とももの場所が見事に構成された佳作である。

今回の建築賞の審査課程で大きな議論になったのは、地域における公共建築のあり方である。財政的基盤が脆弱になる中で、地域が真に求める建築を多様な主体と議論を重ねながら見だしていくという計画的な努力は大いに評価できるものがあるが、それを引き継いで建築化する過程に関わる建築家も含めた関係者の創意工夫が今一つ完成された作品に見えてこないところにある種のふがいなさを感じた。公共建築を通じて北海道の建築の質を高めていく道は、険しい道のりであるが、現実の法規制や財政、ステレオタイプのな既成概念に立ち向かいながら、あきらめずに地域のための質の高い建築を目指す関係者の努力が生まれることを期待したい。

現地審査7作品のうち、4作品は残念な結果となったが、評価の要点を以下に述べ、今後の活躍に期待したい。

- 稚内駅前地区市街地再開発 ～キタカラ・JR 稚内駅・北緑地トイレ～：多様な主体が交錯する複雑な再開発のプログラムを整理し、建築として結びつけた計画力は高く評価できる。最北端の終端駅や離島を訪れる観光客だけでなく、地元市民に対するパブリックスペースの提供は、地域に根ざした建築のあり方を良く表している。しかし、このようなプログラムを空間として翻訳し、デザインとして昇華できたのかどうか。地域に必要なものが装備されたというところまでで終わっている部分があるところが残念である。
- 苫小牧信用金庫まちなか交流館：地域の金融機関が、中心市街地の一等地に持つ地所を活かして、地域貢献したいという思いから生まれた観光情報提供と足湯というプログラムは、大いに評価できる。木造の可能性を表現した交流館部分だけでは、どうしてそのような構造形式をとったのかという必然性が今ひとつ見えてこなかった。本体のオフィス棟と交流館との関係性や敷地全体として建築と周辺地域とのあり方にまで及んだ思考が取れなかったことが悔やまれる。
- ATMN：アトリエ兼住居をシンプルな9mの箱に収めつつ、微妙に角度がついたもう1つのコアによって領域化を図るというプログラムには、空間設定の自由度など、可能性を感じる。オフィスとしてはあり得ると思われるが、それがアトリエ兼住居とした場合、実際には居住が行われているのか、生な生活に対する対応があるのかという点で、住宅としての意味と規範性に少し不満が残った。
- 津別町多目的活動センター「さんさん館」：総合計画立案時から市民が参加してつくられた構想が実現化されていったプロセスは、地域にとっての建築として大いに意味を持つものである。木の産地であるから木をふんだんに使うという判断はまったく誤りではないが、中庭の使われ方やそれを取り巻く諸室との関係性もオーソドックスでこそあれ、何か新たな規範的提案がなされているわけではない。地域全体に建築が出来ることは何かということと、建築の質を高めるというコミュニティ・アーキテクチャーの命題を建築家としてもう1度考える必要があるのではないだろうか？

(文責：小篠 隆生)

(4) 審査講評

◆ 北海道建築賞 「北海道工業大学体育館 “HIT ARENA”」

工科系私立大学である北海道工業大学につくられた、スポーツ系の機能を中心に構成された複合施設である。計画にあたっての2つの大きなテーマは、キャンパス内に点在する既存の体育施設やサークル棟を集約して学生にとってコミュニケーションの場となるべく利便性を高めること、さらに本学研究者による積雪寒冷地における環境技術の反映と実証を行うためのモデル施設となることであった。佐藤孝教授を中心とした建築家チームは、かつて同じキャンパス内において約30の講義室を集約した新講義棟Gを手がけている。ここではオープンで広がりのあるアトリウム空間を教室群で囲い込む構成が採用された。自然光が降り注ぎ、温熱環境が安定する街路状のアトリウムを内包する構成は、学生にとっての快適な居場所をつくりだし、寒冷地における施設モデルとして広く評価された(2002年度北海道建築奨励賞受賞)。今回計画では、新講義棟Gで試みられたアトリウム空間の手法を発展させ、さらに人々が集まる「広場」の特性を現代的に援用

することで寒冷地に相応しい公共空間のあり方が提案された。

具体的には、主たる施設であるメインアリーナを「広場」に見立て、周囲を小さな容積の空間が取り囲むことで賑わいを創出することが意図された。全体の構成は、ひとつの焦点や中心軸をあえてつくりださず、大仰な印象から逃れることが意図されている。その結果、体育施設でありながら人間的スケールが感じられる心地よさが得られた。学生の日々の生活において予期せぬ風景や出会いが生まれ、あたかも雑踏にいるような気分を感じることができる。このようなアリーナのようなビルディングタイプでは、大規模な架構デザインの美しさや技術的工夫を表現の中心に据えるものが多いが、本計画では「広場」というテーマを用いながら親密な空間を実現できたことが大きな成果であろう。

メインアリーナを諸室で囲いこむ空間構成は、もうひとつのテーマである環境技術の活用という点においても大きく寄与している。寒冷地では通年の安定した温熱環境を確保することが求められるが、アリーナ壁面の大きなコンクリート熱容量と外皮の高断熱性能を併用し、相互の熱特性を活用することによって低負荷で快適な温熱環境を維持している。非暖房時においても安定した温度環境を維持できるため、冬期災害時における避難拠点のモデル施設として位置づけることも可能であろう。そのほかソーラーパネルの壁面利用や地中熱ヒートポンプの効率利用と通年活用など、すでに知られた自然エネルギー活用システムをより高度に洗練させて実用性を高める工夫がなされている。

採用された環境技術が表出するファサードデザインにも建築家の個性がよく現われている。コンクリート打ち放しのマッシブな量塊に、直壁の太陽光パネル、日射遮蔽のための庇、奥行き深く穿たれた開口部デザインなどの要素が、多少乱雑さを残したまま配列されている。抽象性や洗練性といったものに対する過度の追求を避け、手の痕跡を残しながら親しみのある風景がつくりだされた。

建築家が培ってきた寒冷地におけるアトリウム空間の手法を発展させて普遍的な形式を導いたこと、さらにこれらの形式や手法を個性的なデザインとして昇華させ、キャンパス内に新しいシンボルをつくり出した手腕を高く評価したい。

(文責：加藤 誠)

◆ 北海道建築賞 「repository」

旭川の中心部からしばらく車で走って市街地を抜けると、あたり一面が広大な田園風景へと変わった。人家も稀にしか視界に入らないような、平坦な広がりの中に、自らの存在を主張しているような、またはその反対でもあるような淡く白いボリュームが現れてくる。約10×23mを底辺とするそのボリュームは、住宅というには相当に大きなものであるが、端部が丸められているためであろうか、それはあたかも遊牧民の住居の佇まいに似ているようにも見える。ここでは隣地境界や道路境界などという形式的な枠組みを超えて、全方位と等価に向き合おうとしている所以であろうか。

ガレージを兼ねた半円形の半外部空間からエントランスへと至ると、内部には贅沢なまでに大きな空間が広がっている。延床面積は約280㎡にも及ぶが、ある意味で構成はシンプルなワンルーム空間である。例えていえば「日」の文字を描くように、全体の外周壁に沿って、あるいは内部を大きく二分するように、幅約2mのゾーンが設けられている。これらのゾーンは、生活の種々の現実を受け止める水回りや収納、あるいは半外部の中間的なスペースとなっている。つまりこの住宅の主たる空間は、内部/外部と内部/内部のいずれにおいても、このゾーンをクッションとして関係づけられているといえる。中でも内部を中央で二分する水回りの領域の存在は、上部から降り注ぐ光の効果も相まって、単に中間領域的なもので内部を包み込むような空間のあり方とは異なる立体感を創り出している。

さらにこれらの構成的な操作に加えて、空間のあり方をより純粹にかつ美しく見せるために、徹底したフォトジェニックな操作が為されている。各スペースを関係づけるテーパの付けられた大きな開口部、細い鉄筋で吊られた外周に沿った床、2×4材の梁による均質な架構表現などによって空間は抽象化され、光の移ろいと空間の見え隠れとによって現象的なものと関係性だけを浮上させようとしている。これらの各々の操作は、いずれも作者が近年試みてきたものであり、この作品においてそれらがひとつのベクトルに向かって結実しているように見える。その意味に

において、まだ若くして作者はひとつの集大成を創り上げたともいえるだろう。

北海道の建築家にとって、中間的な領域は大きな関心であり、これまでも多くの試みが為されてきた。しかしここでの作者のように、それを建築全体の問題として引き受けて、細部に至るまで全てを徹底して構想しようとするのは稀であったように思われる。表面的あるいは部分的に止まることなく、また“北海道らしい”という既成の枠組みを安易に出発点とすることなく、地域環境的なものを含め様々な条件を自ら咀嚼して、建築全体を大胆かつ繊細に構想していくこと。重要なのは、北海道の問題を必然として受け止めながらも、そのような閉域を超えたところにまで建築表現の可能性を開いていくことなのだろう。逆説的ではあるが、地域的な問題に深く徹底して取り組むほど、外部へと広く共鳴していくものなのかもしれない。北海道の建築家でありながらも、“北海道の”という枕詞なしにも広く語られ得ること。これこそが、作者が北海道にもたらした最も大きな功績であるようにも思われる。

(文責：山田 深)

◆ 北海道建築奨励賞 「SPROUT」

琴似発寒川沿いの住宅街に建つこの作品は、その変形したプロポーションと赤い板金外装により、造形に走った、少々気をてらった作品ではないかという第一印象を与える。

敷地 22 坪、延床面積 119 m²。

「狭さ」への取り組みは、現地審査を行って納得させられた。敷地形状に合わせた 1 階平面形状、その隅切った部分に玄関が配置されている。内部はディテールまでしっかりとデザインされた階段を中心として、レベル差を持ってつながる分節された空間で構成されている。一つ一つの要素は決して十分な広さを持たないが、周辺との隔たりを作ることで、狭いことの「落ち着き」「心地よさ」を作り出している。居間や DK、浴室は大きな開口で外部とのつながりを持ち、その狭さを感じさせない。「狭さ」はその空間と周辺とのつながりで印象に変化をもたらし、多様な展開を導き出している。作者は、密度の濃いデザインで、ここにたくさんの仕掛けを詰め込み、そしてその精度が高い。特に光の取り扱いが上手く、開口の絞り込みや開放による操作で内部の光が充実している。階段室・廊下を活かした、光井戸や自然換気の工夫、床下暖房なども大袈裟でなく機能を形にして心地よくまとめている。車好きの施主ならではのガレージの仕掛けや、玄関わきに設えられた訪問者のための小上がりなどは、遊び心と施主との信頼関係によりもたらされたもので、このプロジェクトが成功していることを物語る。住宅は、少々抑圧された狭隘な空間であるからこそ、そこに不均質な光や外部との関係性において多様な「居場所」が形成される。まさに、ここで展開されたのは、「狭いが故の豊かな居場所づくり」であったと確信した。

(文責：久保田克己)

5. 2 卒業設計優秀作品（日本建築学会北海道支部賞）

(1) 卒業設計優秀作品審査委員会（主査：菅原 秀見君，委員数：6 名，委員会開催数：1 回）

2013 年度卒業設計優秀作品審査委員会においては、「大学」「短大・高専・専門学校」「工業高校」の部門別に候補作品各々について合同で審査を行い、合議の上各賞を選出した。審査に先立って学会の表彰規定における表彰の目的、それに基づく審査の考え方を各審査委員で確認した。

本年度は「大学」の部では金賞 1 点、銀賞 1 点、銅賞 1 点を選定した。「短大・高専・専門学校」の部では金賞 1 点、銀賞 1 点、を「工業高校」の部では金賞 1 点、銀賞 1 点、銅賞 1 点を選出した。「短大・高専・専門学校」の部では応募作品が 2 作品しかなく、今後の作品応募の呼びかけなど課題があった。審査後、講評の論点を確認し、各選考作品の講評者の担当を決定した。

審査員：

主 査：菅原 秀見君

委 員：遠藤謙一良君，小倉 寛征君，小西 仁彦君，齊藤 文彦君，中山 眞琴君

(2) 受賞者

◆ 大学の部 (応募作品数：13点)

- ・金賞 成ヶ澤はるみ君：北海学園大学工学部建築学科
作品名 — [arc+reature]
— 軟石と暮らすストックミュージアム
- ・銀賞 可香 葵君：北海道工業大学空間創造部建築学科
作品名 — 生命の諧調
- ・銅賞 井上 桂輔君：北海道大学工学部環境社会工学科建築都市コース
作品名 — 「赤金の森」

◆ 短大・高専・専門学校の部 (応募作品数：2点)

- ・金賞 谷本 賢耶君：北海道職業能力開発大学校建築科
山田 浩史君：北海道職業能力開発大学校建築科
作品名 — ZENIBAKO への空間提案
- ・銀賞 川久保 圭君：釧路工業高等専門学校建築学科
作品名 — 家っぽいグループホーム

◆ 工業高校の部 (応募作品数：6点)

- ・金賞 鈴木 結衣君：北海道名寄産業高等学校建築システム科
作品名 — The legend of maple
ここに復活！！道北の結婚式場兼娯楽複合施設
「ザ・レンジェンドオブメープル」
- ・銀賞 榮田 民人君：北海道札幌工業高等学校建築科
作品名 — 六花の図書館
- ・銅賞 松本 明人君：北海道旭川工業高等学校建築科
作品名 — a hive ～笑顔の繋がり～

(3) 審査講評

◆大学の部

金賞・成ヶ澤はるみ君

ヴァナキュラー作品である。であるがこれがヴァナキュラー建築なのか、かなり読み解くのに時間を要した。というのも、そのヴァナキュラーらしさの表現がどこにもないのだ。それところが、アーキリーチャーと命名された建築生物は異様である。

大谷石の石切り場に見られるあの重く壮大な建築を超えた「何か」が何も画面から読み取れない明るくかるやかで楽しげだ。これも時代なのか、我々が化石化しているのか、べたつきのないヴァナキュラー建築ってこうなのかなと思いつつも未来は明るいぞとも感じた作品である。

(文章 中山 眞琴)

銀賞・可香葵君

北海道東端の野付崎に計画されたランドスケープ化された装置はこの場所が持つ美しくも厳しい自然環境を受け入れながら可視あるいは不可視となり海の潮位と現象を享受するための体感の場として美しく海面に横たわる。そのガラスの歩廊は潮位を読み取り設定されており満潮時には海面と同面になる。繊細なドロイングはその情景を伝え一度は体現したいと思わせるほどである。ここで人間が持つ五感が改めて奮い立たてられ海面との距離感を感じながらガラ

スの路を進む。この海に引かれたきらりと光る一筋の路は不変で有るが海の変化で多様化されるところにこの空間の美学を感じる。

(文責：小西 彦仁)

銅賞・井上桂輔君

渡良瀬遊水池に生まれた自然を再発見するための、「装置」としての建築の提案である。敷地の持つ歴史と、その結果生まれた独自の湿原環境を丁寧に調査したうえで設計に取り組む姿勢を評価した。また、それらを可視化する水位計を備えた銅柱を配置するという提案に、構造や設備、素材への幅広い建築的視点を感じた。一方で、描かれた建築自体にどこか既視感を感じる。形態について別の解法があり得たのではないか。更なる造形的な展開に期待出来る作品である。以上を総合的に考慮して銅賞にふさわしい作品であると判断した。

(文責：小倉 征寛)

◆ 短大・高専・専門学校の部

金賞・谷本賢耶君、山田浩史君

本作品は、かつて賑わっていた銭函運河に着目し、駅と運河を結ぶことで、海と山をつなぎ、豊かな自然を感じる ZENIBAKO として提案したものである。建物単体ではなく、駅からの散策路や橋を一体的に整備し、地域に新たな価値を創造しようという意欲を感じる案であった。複合施設としての提案が少ない中、レストラン、ガーデン、図書コーナーなど複雑な構成にチャレンジし、一つの空間としてまとめ上げている点で、金賞とした。

(文責：齊藤 文彦)

銀賞・川久保圭君

札幌市内郊外に計画されたグループホームの提案であり、はだしで歩くデッキに施設が囲まれ、敷地内に計画されている保育園や学童保育施設、周辺の地域との交流を生み出している。暖かい光が漏れる模型写真が印象的であるが、部屋を家と見立てた街並みの形成と、周辺の住宅街との調和がよく表現されている。また、介護単位よりも生活単位を小さくする提案、その交流拠点としてのサブリビングなど、建築計画的なアプローチが意欲的であり、銀賞として評価した。

(文責：菅原 秀見)

◆ 工業高校の部

金賞・鈴木結衣君

名寄市民の多くの人々に耳を傾け、街に求められる“親しまれる共有空間”をかつて市民に親しまれ閉鎖したホテルメープルの記憶に重ねた、地域再生としてのシンボル空間の計画です。フリーハンドのコンセプトシートはプロジェクトのプロセスからテーマ・コンセプト・空間イメージがわかりやすく展開されていて興味深かった。空間を構成する8角形のユニットは3つのゾーン・5層にダイナミックに構成され、時間の記憶を繋ぎ、新鮮な空間と風景を街に創り上げた内容は金賞に十分値する。建築を見つめるまっすぐで多様で豊かな視点をこれからも大切にしてください。

(文責：遠藤 謙一良)

銀賞・榮田民人君

雪をテーマに据え置いた作品は、数多く過去にもあった。北海道に住んでいて建築を目指す若者にとって、当然といえる題材である。しかし、今回の図書館はいままでとはちょっと違う。3つに文節された棟はそれぞれ広がりや明るさや使いやすさ、そして親和感を兼ね備えている。しかもその全体像は美しい。一瞬安藤風かなと思ったが、そんなこともなく立面も大人っぽく秀逸である。今後に大きいに期待したい。

(文責：中山 眞琴)

銅賞・松本明人君

旭川に建つ商業施設の提案である。

自然と一体となった敷地環境を手掛かりしたデザインに取り組み、自然界に見られるハニカム構造を採用した象徴的形態を持った建築となっている。奇抜な外観はともすると使い難い内部空間を生み出しがちであるが、この作品では柱や梁を効果的に利用することにより商業空間の魅力付けに成功している。また、CGを活用した内部空間の表現など、作品の特徴を効果的にプレゼンテーションした点も評価された。

以上を総合的に考慮して銅賞にふさわしい作品であると判断した。

(文責：小倉 寛征)

5. 3 優秀学生・生徒（日本建築学会北海道支部賞）

2013年度道内大学・短大・高専・工高優秀学生・生徒として以下の学生・生徒を表彰した。

井上 桂輔君・坪内 健君：北海道大学工学部環境社会工学科建築都市コース
小林 花織君・中野 春菜君：北海学園大学工学部建築学科
佐藤 雄輝君・池本 進君：北海道工業大学工学部建築学科
篠原 早喜君・武田 千愛君：室蘭工業大学工学部建築社会基盤系学科
押野 哲也君・寺島 良成君：東海大学芸術工学部建築・環境デザイン学科
池上 史君・鹿野 倅生君：道都大学美術学部建築学科
棚元はな子君・安永 千晶君：札幌市立大学デザイン学部デザイン学科空間デザインコース
岩崎 未紅君・本間 慎也君：釧路工業高等専門学校建築学科
西原 寧音君：北海道職業能力開発大学校建築技術システム技術科
山本 純平君：北海道職業能力開発大学校建築科
西澤 天汰君：北海道札幌工業高等学校建築科
宮坂 和登君：北海道札幌工業高等学校定時制建築科
小熊 匠君：北海道小樽工業高等学校建設科建築デザインコース
山田 孝君：北海道小樽工業高等学校定時制建築科
中村 洋輝君：北海道函館工業高等学校建築科
小野寺拓磨君：北海道函館工業高等学校定時制建築科
塚原 徳敏君：北海道旭川工業高等学校建築科
吉澤 紘奈君：北海道旭川工業高等学校定時制建築科
岩渕 淳也君：北海道苫小牧工業高等学校建築科
堀合 諒佑君：北海道苫小牧工業高等学校定時制建築科
石黒 学君：北海道帯広工業高等学校建築科
新沼 雄基君：北海道釧路工業高等学校建築科
鈴木 結衣君：北海道名寄産業高等学校建築システム科
黒川 裕介君：北海道室蘭工業高等学校建築科
向山 大暉君：北海道留萌千望高等学校建築科
原田 一步君：北海道北見工業高等学校建設科

5. 4 日本建築学会北海道支部功労賞

本賞は、当支部の維持・発展にとって功績・功労のあった支部に所属する会員に対して感謝の意を表するとともに、更なる支部活動の活性化と意識の高揚を図ることを目的としている。

2013年度は、最も長期にわたり支部会員を継続された以下の1社の法人・賛助会員を表彰した。

株式会社 北農設計センター

5. 5 日本建築学会北海道支部技術賞

- (1) 北海道支部技術賞選考委員会（主査：佐藤 孝君，委員数：14名 委員会開催数2回）
選考委員：支部長，学術委員会委員長，学術委員会委員の計14名

(2)受賞者

◆該当なし

(3)審査経緯・講評

- ・本年度は、下記2件の応募があった。
 - (1) 花崗岩打ち込みPC板による深い陰影のある外装—札幌大通西4ビルにおける展開—
 - (2) 地産材：札幌軟石による「地域と地産材が好循環する仕組みづくり」の実践
- ・応募者への質問と2回の技術賞選考委員会を開催し、議論、採決の結果、今回は「受賞候補者の対象なし」とした。その理由と結果を常議員会に報告した。
 - (1) については、積雪寒冷地における深い陰影のある外装の実現という地域的問題を正面から捉え、その建築の普及において評価する。しかし技術的な新規性を見い出すことが出来なかった。
 - (2) については、地産材である札幌軟石の長年の供給システム・建築技術の確立・継承について高く評価できる。しかし応募の「地域と地産材が好循環する仕組みづくり」としては、現段階では、活動の緒についたところと考えられ、もう少し時間の経過が必要であるとした。

(文責：佐藤 孝)

6. 北海道建築作品発表会の実施

- (1) 北海道建築作品発表会委員会（主査：米田 浩志君，委員数：3名，実行委員数：10名，委員会開催数：5回（実行委員会4回を含む））

2013年11月22日の発表会に向けて第33回北海道建築作品発表会委員会及び実行委員会が開催された。3名によって構成される北海道建築作品発表会委員会は1回開催され、メールによる会議を複数回行った。その後、実行委員7名が加わった実行委員会は4回開催された。実行委員会の具体的な作業としては、各スケジュールの計画、応募要項の作成、作品の受付、プログラム編成、作品のデータ集約などである。発表会場は、例年北海道立近代美術館講堂にて開催した。

発表会当日は、第33回建築作品発表会作品集VOL-33を発刊した。また、発表会の内容について、北海道建築士事務所協会誌「ひろば」2013に実行委員の小篠隆生氏が執筆した。また、日本建築学会「建築雑誌」2014/2月号に植田暁が執筆した。

- (2) 北海道建築作品発表会の開催

第33回建築作品発表会の報告

期日：2013年11月22日（金曜日）

会場：北海道立近代美術館講堂

発表作品数：27作品

今年も北海道建築の一年間の総括の場といえる第33回北海道建築作品発表会が開催された。11月22日と年末の慌ただしい時期とはいえ、作品発表の積極的な登録と共に、様々な年齢層及び職種の方々含め多くの参加者があった。建築作品発表会のプログラム構成は、第1部、2部の各発表に加え、第3部には全発表作品を横断しながら議論を深めるための「フォーラム」が配置された。第1部、2部の発表では、簡単な質問の受け答えはあるものの時間の制約もあって深い議論はできない。そのため、第3部にフォーラムの時間を確保し司会者が様々な切り口をもって、あらためて各作品の特性、あるいは作品間の共通性に着目し議論を進行させ、2013年の北海道建築界の一面を明らかにすることになる。一方、オーディエンスは、発表者たちの議論を目の当たりにしながら、自らも自らに対して対話を生み出す。この自己との対話からは、何かがふつつと喚起され、今後の建築を捉えていく上で有益な観点を獲得することが出来る。このように、この建築作品発表会は、現状の問題意識を共有し、そして建築をさらに進化させていくための動機

付けの機会となってきた。あらためて 33 年間の建築作品発表会の歴史は、北海道建築を成長へと導くための一つのステージとして機能してきたと言える。

7. 特別委員会

7. 1 事業主査連絡会（事業系 5 委員会の主査および事業系担当常議員）

本連絡会では、事業系 5 委員会の事業進捗状況と連携、その際の問題点等の把握、常議員会へ改善提案等の活動を行うこととしている。過去議題にあがった事項の対応として、本年度についても建築文化週間中に第 38 回の北海道建築賞表彰式と記念講演会が実施された。また、卒業設計審査委員会より出されていた HP への入選作品の掲載については、HP 管理委員会との連携し最新年度までが掲載されている。

7. 2 総務委員会（委員長：小澤 丈夫君，委員数：5 名，委員会開催数 1 回）

経理関連業務としては、支部の毎月の収入・支出内容についての確認、経理執行状況と予算との比較検討、全体の財務管理を行った。収支状況について、四半期に一度の頻度で、常議員会にて報告した。

日本建築家協会北海道支部との連携に関しては、合同委員会（1 回）を開催して、両団体の活動に関する情報交換を行った。

7. 3 ホームページ管理委員会（主査：斉藤 雅也君，委員数：3 名，メール等による情報交換を数回実施）

- 1) 常議員会、事務局等の要請に応じて掲載内容の更新作業を行なった。
- 2) 委員間でメール会議を実施した（数回）。
- 3) 2013 北海道大会専用の公式ホームページと連携を行なった。
- 4) 各委員会（学術委員会、事業系委員会等）の情報を最新にした。

8. 講習会・シンポジウム等の開催

8. 1 講習会

（1）本部主催講習会

該当なし

（2）支部委員会主催講習会（セミナー）

該当なし

8. 2 講演会

（1）本部主催講演会

該当なし

（2）支部主催講演会

名 称	期 日	会 場	講 師	参加者数
記念講演会「雪と大空間構造」	2013. 6. 29	北海道工業大学	川口 衛君	150 名

建築文化週間「第38回北海道建築賞表彰式・記念講演会」	11. 1	北海道大学遠友学舎	佐藤 孝君 他2名	約80名
「建築における自然エネルギー利用～太陽光・風・雪～」	11.18	北海道留萌千望高等学校	魚住 昌広君	39名
「第33回北海道建築作品発表会」	11.22	北海道立近代美術館大講堂	作品数27点	約300名
「木造建築の未来～木造建築の最先端」	2014.1.22	北海道釧路工業高等学校	長谷川圭一君	81名

(3) 支部委員会主催講演会

名 称	期 日	会 場	講 師	参加者数
シンポジウム「路面電車からはじまるまちづくり～点(個人)から線(電車)、そして面(まち)へ～」(都市計画専門委員会)	2013. 8. 9	札幌市立大学サテライト大会議室	和田 哲君 他2名	48名
建築文化週間「地震防災体験学習－親子で始める地震防災対策－」(都市防災専門委員会)	10. 5	新ひだか町青少年会館	北大、北総研 他	40名
「千歳市の都市計画の動向」(都市計画専門委員会)	2014. 1. 22	北海道大学学術交流会館	磯部 徹君	20名
ワークショップ「アイスカテナリーを作ろう！」(構造専門委員会)	2014. 2. 15	北海道大学 MUTSUMIホール	構造専門委員会委員	14名
ワークショップ「寒冷地の住宅の換気と暖房を考える－省エネ基準改正をきっかけとして－」(環境工学専門委員会)	2. 20	札幌市立大学サテライトキャンパス	福島 明君 他5名	45名
第8回環境工学系・卒業論文発表会 EGGs13(環境工学専門委員会)	3. 7	札幌市立大学サテライトキャンパス	発表題数 25題	51名

8. 3 展示会

開催日	見 学 場 所	解説者	参加者数	主 催
2013. 6. 24	「創価学会室蘭文化会館新築工事」見学会	長谷川圭一君	26名	構造専門委員会 材料施工専門委員会
9. 17	「札幌三井 JP ビルディング新築工事」見学会	現場担当者	25名	構造専門委員会 材料施工専門委員会
11. 2	「ニセコ町の公営住宅」見学会	黒龍敏雄君 金沢礼至君	11名	環境工学専門委員会 北方系住宅専門委員会

8. 4 見学会

開催日	名 称	会 場	参加者数
2013. 5. 15～17 5. 23～27 8. 30～9. 1 11. 11～14	全国大学・高専卒業設計展示会	室蘭工業大学 東海大学 北海道大学 釧路工業高等専門学校	139名 106名 1300名 100名

7.4～12.9	道内工業高校卒業設計優秀作品巡回展	道内工高 11 校	合計 451 名
----------	-------------------	-----------	----------

9. 本部関連事業・その他

9. 1 2013 年度支部共通事業設計競技の実施

(1) 共通事業設計競技審査委員会（主査：川人 洋志君，委員数：5 名，委員会開催数：1 回）

支部審査員：

主 査： 川人 洋志君

委 員： 赤坂 真一郎君，小西 彦仁君，山田 良君，山之内 裕一君

(2) 審査講評

委員会活動として設計競技審査会を 2013 年 7 月 10 日、午後 6 時より日本建築学会北海道支部会議室に於いて、5 名の委員全員出席のもと開催した。本年度の設計課題は「新しい建築は境界を乗り越えようとするところに現象する」であり、12 案の応募があった。5 名の委員全員による活発な討議を経て 4 案を支部入選案として決定した。入選案 2 案は、東京から、他の 2 案は道内からの応募であった。支部入選案 4 案は、残念ながら全国審査で入選はなかった。今後の進展を期待したい。

2013 年度支部共通設計競技

「新しい建築は境界を乗り越えようとするところに現象する」審査評

設計競技審査会を 2013 年 7 月 10 日、午後 6 時より日本建築学会北海道支部会議室に於いて、5 名の委員全員出席のもと開催した。本年度の設計課題は「新しい建築は境界を乗り越えようとするところに現象する」であり、12 案の応募があった。5 名の委員全員による活発な討議を経て 4 案を支部入選案として決定した。入選案 2 案は、東京から、他の 2 案は道内からの応募であった。支部入選案 4 案は、残念ながら全国審査で入選はなかった。今後の進展を期待したい。以下に支部入選 4 案の審査評を記す。

野村 隆太. 池辺 俊佑. 伊藤 実奈子. 堤坂 浩之-東京理科大学大学院 案

「境界を乗り越える」ことと「現象する」こと。建築の意味と可能性の提案に実在の地域課題を重ね合わせ、アイディアの純度と具体的な空間や風景をイメージする力量が試される。提示されたアイディアは、「固有性と普遍性の境界」の再考を促すメディアとしての建築群。アイヌ文化と関係の深い北海道阿寒湖周辺の景観・文化と生態の特徴を映しながら変化し続ける空間である。「固有性」を阿寒の文化や生態とし、「普遍性」を見慣れた建築像に置き換えた上で家型の建築群を配置していく。逆説的に同じ型を並べることで「境界」をわれわれに意識させ、時間の経過を伴いながらの「現象」を包含させる切り口は、美しいグラフィックとともに僕を魅了した。

(文責：山田 良)

山下 輝彦. 山口 哲治-室蘭工業大学大学院 案

白の抽象化その中であって彩色が入ることにより人を刺激するという。この計画はこの二つの関係が持つ「間」(あわい)を操作し新しい空間をつくりだそうとしている。建物中央部に複数の機能空間を配して、それを囲むように半透明の白いポリカーボネートまたは色のついたものを大屋根として用いそれがバッファゾーンとなっている。北海道の海辺の町の気候条件を分析しながら年間を通して快適に使用できる空間の提案である。建物の外周境界を変えながらそれぞれのシーズンに様々なシーンを生み出すことは、過疎化した街を活性化してゆく場としての役割を成すなど多様なアクティビティを創造させ、建築内外の境界の曖昧性がつくる現象は魅力あふれる空間を予感させる優れた提案がなされている。

(文責：小西 彦仁)

佐々木 嶺-東京理科大学大学院 案

明治期、北の大地札幌に歴史の境界を越えて開拓による近代化現象がもたらされた。敷地に選ばれた大通公園は当時都市防火線として設定された道路であったが、冬の雪まつり夏のビアガーデンなどが定期的開催される緑豊かなオープンスペースとして市民に愛されている。計画は、市民がより日常的に集い日々自然環境と呼応することを目指している。具体的には、大通公園という微地形に降り注ぐ雨や雪の微気象の変化を受け止める透明可変な建築がつくる空間を提案。さらに自然エネルギー利用循環を意図した。具現化へは困難が伴うものの、ユニットの密度やスケール感そして可変性への試みを通じて新たな都市の日常を獲得しようとする夢と意欲を評価したい。

(文責：山之内 裕一)

島口 拓也.相澤 幸輝-北海道大学大学院 案

彼らは、「建築家」と「一般市民」との境界を乗り越えたところに新たな都市空間が現れると言う。一般の人々が「都市を考えるツール」としてスマートフォンを使いこなし、新たな都市空間の利用法を見知らぬ他者と共有することで、都市を考えるきっかけが生まれたら…。テロ、震災、原発事故、温暖化など個々人の力の限界を感じずにはいられない事象が続く今だからこそ、建築関係者が持つ既成概念に縛られない「普通の人々」が抱く自由なアイデアを、多くの人々が共有し昇華させていくこの提案に、建築の未来への希望と可能性を感じた。

(文責：赤坂 真一郎)

9. 2 作品選集支部選考の実施

(1) 作品選集支部選考部会活動報告(主査：加藤 誠君：委員数 6 名：委員会開催数 2 回及び 現地審査)

2013 年度応募数全 7 作品に対して、6 日に渡る現地審査(日程の都合上、一部は委員個別の現地審査による)並びに 2 回にわたる選考委員会を開催し、本部にて決定された支部推薦枠である 4 作品を選考し本部へ推薦した。

支部審査員：

主 査：加藤 誠君

委 員：小澤 丈夫君、高松 康二君、照井 康德君、山田 良君、山脇 克彦君

(2) 作品選集支部選考の結果

支部応募作品数 7 点

支部選考通過作品数 4 点(内本部採用・作品選集掲載作品数 2 点)

・当麻の家(作品選集掲載作品)

堀尾 浩君：堀尾浩建築設計事務所

長谷川 大輔君：長谷川大輔構造計画

・北海道工業大学“HIT ARENA”(作品選集掲載作品)

佐藤 孝君：北海道工業大学

芳川 朝彦君：a-plus 芳川朝彦建築計画室

種田 俊二君：清水建設一級建築士事務所

9. 3 建築文化週間

- ①テーマ：「地震防災体験学習－親子で始める地震防災対策－」
主 催：日本建築学会北海道支部、北海道立総合研究機構北方建築総合研究所
共 催：新ひだか町
後 援：北海道
日 時：2013.10.5(土)
場 所：新ひだか町青少年会館
講 師：北海道大学、北総研
参加対象：学会員、町民(親子)、市町村職員、建築技術者
参加者：40名
- ②テーマ：歴史的建造物の見学「建築散歩～豊平館を見て楽しむ」
主 催：日本建築学会北海道支部
共 催：札幌市観光文化局文化部
日 時：2013.10.12(土)
場 所：札幌市中央区中島公園
講 師：松本 優(文化財建造物保存技術協会)
参加対象：学会員、一般市町村民、学生
参加者：34名
- ③ テーマ：第38回(2013年度)北海道建築賞表彰式・記念講演会
主 催：日本建築学会北海道支部
日 時：2013.11.1(金)
講 師：佐藤 孝「北海道工業大学体育館“HIT ARENA”」の設計
(第38回北海道建築賞)
五十嵐 淳「repository」の設計(第38回北海道建築賞)
石塚 和彦「SPROUT」の設計(第38回北海道建築奨励賞)
場 所：北海道大学遠友学舎
参加対象：一般市民、建築関係者、学生
参加者：約80名

10. 建築関連団体との活動

10. 1 AIJ-JIA 合同委員会 (委員数(AIJ)：8名, 開催数：1回)

本委員会では、AIJ, JIA 両団体の活動の活性化を目的として、合同の企画等に関わる事項について協議した。協議内容は、①AIJ-JIA ジョイントセミナーの企画、②両団体の活動内容、③両団体のイベント紹介と参加要請についてである。尚、2013年度については、AIJ、JIA 両者の全国大会を札幌で開催したため、ジョイントセミナーの開催を見送ることになった。

10. 2 北海道建築設計会議 (幹事会開催数：12回)

本会議は、日本建築学会北海道支部、北海道建築設計事務所協会、日本建築家協会北海道支部、北海道建築士会、北海道まちづくり促進協会、北海道設備設計事務所協会、日本構造技術者協会北海道支部、日本建築積算協会北海道支部、建築設備技術者協会北海道支部及び北海道建築技術協会の10団体により構成されている。本会からは、最上公一と高松圭の2名を参加させた。幹事会においては、各団体の法人化等について情報交換や意見交換を行った。

11. 2013年度日本建築学会大会(北海道)の開催

会期：2013年8月30日(金)～9月1日(日)

会場：北海道大学（札幌市北区北 13 西 8）

メインテーマ：創（つくる）

大会テーマを「創（つくる）」とし、会員をはじめ一般市民を対象とした諸行事を多数開催した。

12. 共催・後援

期 日	名 称	会 場	主 催
応募締切 2014. 8. 7	第 38 回北の住まい住宅設計コンペ		(一社)北海道建築士事務所教会
10. 9	コンクリートの日 in Hokkaido 出前講座 大学から実務者へ ～情報技術の発信と情報交換～	藤田観光ワシントンホテル旭川	(公社)日本コンクリート工学協会北海道支部
10. 16 他	住宅建築物耐震改修セミナー及び耐震改修促進法改正説明会	釧路市交流プラザさいわい他	北海道
11. 6	サステイナブルキャンパス構築のための国際シンポジウム 2012	北海道大学学術交流会館	北海道大学
12. 7	地域防災力向上研修会	釧路工業高等専門学校	北海道 HUG 研究会他
12. 14	日本都市計画学会北海道支部研究発表会	札幌市民ホール	(公社)日本都市計画学会北海道支部
2014. 1. 12	防災ワンデー「釧路防災講演会 2014」	釧路アクア・ベール	釧路市連合防災協議会他
2. 5	平成 25 年度第 2 回都市地域セミナー 「産業遺産を生かした“地域づくり”を考える」	札幌市立大学サテライトキャンパス	(公社)日本都市計画学会北海道支部
2. 13	第 24 回旭川建築作品発表会	旭川市神楽公民館 「木楽輪ホール」	旭川まちなみデザイン推進委員会
3. 14	「あなたの住環境と健康・安全を考える」	北海道大学工学部 B31 教室	北海道大学大学院高 額研究院建築環境研究室
応募締切 4. 30	第 5 回 JIA・テスクチャレンジ設計コンペ	札幌駅前通地下歩行空間 「ドオリ HIROBA」	(公社)日本建築家協会北海道支部

II 2013年度収支決算報告

2013年度 貸借対照表

科 目	当 年 度	前 年 度	増 減
I 資産の部			
1 流動資産			
現金預金	5,723,872	2,247,730	3,476,142
前払金	168,684	163,999	4,685
仮払金	33,346	123,366	△ 90,019
流動資産合計	5,925,902	2,535,094	3,390,808
2 固定資産			
(1) 特定資産			
学術振興基金引当資産	2,540,000	2,810,000	△ 270,000
災害調査研究基金引当資産	1,900,000	1,900,000	0
支部基金引当資産	2,810,000	2,810,000	0
退職給付引当資産	780,000	720,000	60,000
特定資産合計	8,030,000	8,240,000	△ 210,000
(2) その他の固定資産			
敷金	561,550	561,550	0
その他の固定資産合計	561,550	561,550	0
固定資産合計	8,591,550	8,801,550	△ 210,000
資産の部合計	14,517,452	11,336,644	3,180,808
II 負債の部			
1 流動負債			
前受金	12,000	0	12,000
預り金	20,023	20,283	△ 240
仮受金	584,974	584,231	743
流動負債合計	616,997	604,494	12,503
2 固定負債			
退職給付引当金	780,000	720,000	60,000
固定負債合計	780,000	720,000	60,000
負債の部合計	1,396,997	1,324,494	72,503
III 正味財産の部			
1 一般正味財産			
(うち特定資産への充当額)	13,120,455	10,012,150	3,108,305
(うち特定資産への充当額)	(7,250,000)	(7,520,000)	(△ 270,000)
正味財産合計	13,120,455	10,012,150	3,108,305
負債及び正味財産合計	14,517,452	11,336,644	3,180,808

2013 年度 正味財産増減計算書

科目名称	当年度	前年度	増減	科目名称	当年度	前年度	増減
I 一般正味財産増減の部							
1 経常増減の部							
[1] 経常収益				[2] 経常費用			
(1) 特定資産運用益	(18,446)	(17,691)	(△7,045)	(1) 事業費	(48,758,010)	(4,388,590)	(44,369,510)
特定資産受取利息	18,446	17,691	△7,045	研究会会費	(46,361,386)	(2,103,135)	(44,278,251)
(2) 事業収益	(41,783,123)	(3,893,923)	(38,922,200)	研究会会費	1,979,132	2,103,135	△124,003
研究会事業収益	(41,783,123)	(2,387,823)	(39,428,200)	大会事業費	44,402,286	0	44,402,286
研究会事業収益	2,096,483	2,387,823	△289,440	文化事業・展示会費	(331,751)	(336,122)	(△4,371)
大会事業収益	38,683,640	0	38,683,640	文化事業費	385,207	301,840	3,267
受託事業収益	0	800,086	△800,086	展示会事業費	28,844	24,182	△4,662
その他の事業収益	178,000	178,086	0	調査研究事業費	1,231,268	801,823	379,389
(3) 雑収益	(103,867)	(111,181)	(△8,034)	表彰・贈与事業費	(811,473)	(870,414)	(△141,059)
雑収益	(103,867)	(111,181)	(△8,034)	表彰関係費	782,547	860,053	129,452
雑取利息	1,854	739	321	表彰関係費	21,926	10,353	11,573
その他の雑収益	102,013	110,368	△8,355	委託事業費	0	435,000	△435,000
(4) 他会計からの繰入額	(15,539,000)	(8,591,500)	(△8,947,500)	(2) 管理費	(8,779,821)	(8,779,132)	(△687)
基本部門からの繰入額	(15,539,000)	(8,591,500)	(△8,947,500)	会議費	(231,807)	(240,023)	(△8,216)
支部費	1,595,000	1,498,000	17,000	総会費	218,477	199,280	19,197
経費補助費	1,830,000	1,937,300	△117,300	役員会費	13,330	25,330	△12,000
事業促進費	793,800	300,086	493,714	運営費	0	15,493	△15,493
支部研究助成費	200,800	200,086	0	給与手当	1,871,900	1,887,780	14,140
教育文化事業交付金	536,800	538,086	△1,286	福利厚生費	318,005	314,033	4,972
大会交付金	4,590,000	0	4,590,000	退職給付費用	60,000	60,080	0
支部事務費	300,800	300,086	0	通信費	137,981	141,282	△4,251
支部事務経費	1,858,000	1,858,000	0	印刷費	92,878	92,889	9,911
				消耗品費	122,412	95,784	26,628
				旅費	432,800	485,443	△52,643
				事務経費	2,498,083	2,498,171	△8,088
				租税公課	2,380	2,873	△4,931
経常収益計	57,829,838	9,783,215	47,857,621	経常費用計	56,512,581	10,146,632	44,368,289
当期経常増減額	3,196,305	△402,417	3,510,722				
2 経常外増減の部				[2] 経常外費用			
[1] 経常外収益				経常外費用計	0	0	0
経常外収益計	0	0	0				
当期経常外増減額	0	0	0				
当期一般正味財産増減額	3,196,305	△402,417	3,510,722				
一般正味財産増減額	10,012,186	10,414,887	△402,417				
一般正味財産増減額	13,128,438	10,012,190	3,106,305				
II 指定正味財産増減の部							
(1) 一般正味財産への振替額	(0)	(0)	(0)				
当期指定正味財産増減額	0	0	0				
指定正味財産増減額	0	0	0				
指定正味財産増減額	0	0	0				
正味財産期末残高	18,129,456	10,012,150	8,106,305				

2013 年度 収支計算書

科目名称	予算額	決算額	差異	科目名称	予算額	決算額	差異
I 事業活動収支の部				I 事業活動収支の部			
1 事業活動収入				2 事業活動支出			
(1) 特定資産運用収入	(5,000)	(10,648)	(△5,648)	(1) 事業費支出	(54,880,000)	(48,758,010)	(6,121,990)
特定資産利息収入	5,000	10,648	△5,648	研究費金事業費支出	(62,340,000)	(46,381,308)	(15,958,692)
(2) 事業収入	(44,618,000)	(41,898,123)	(2,719,877)	研究費金事業費支出	2,130,000	1,878,132	251,868
研究会事業収入	(43,840,000)	(41,783,123)	(2,056,877)	大会事業費支出	50,210,000	44,402,288	5,807,712
研究会事業収入	2,130,000	2,089,483	40,517	文化事業・展示会費支出	(380,000)	(331,751)	(48,249)
大会事業収入	41,710,000	39,693,640	2,016,360	文化事業費支出	360,000	305,807	54,193
その他の事業収入	175,000	175,000	0	展示会事業費支出	30,000	25,944	4,056
(3) 雑収入	(121,000)	(103,087)	(17,913)	調査研究事業費支出	1,370,000	1,231,308	138,692
雑収入	(121,000)	(103,087)	(17,913)	表彰・顕彰事業費支出	(760,000)	(811,473)	(△51,473)
利息収入	1,000	1,064	△64	表彰・顕彰費支出	720,000	789,647	△69,647
その他の雑収入	120,000	102,013	17,987	設計費支出	40,000	21,828	18,172
(4) 他会計からの繰入金収入	(15,385,000)	(15,538,000)	(△153,000)	(2) 管理費支出	(5,814,000)	(5,898,521)	(84,521)
基本部門からの繰入金収入	(15,385,000)	(15,538,000)	(△153,000)	会議費支出	(244,000)	(231,807)	(12,193)
支那費収入	1,377,000	1,309,000	△68,000	謝金費支出	200,000	218,477	△18,477
経営助成費収入	1,830,000	1,890,000	△60,000	役員会費支出	40,000	13,330	26,670
事業経費収入	750,000	750,000	0	運賃費支出	4,000	0	4,000
支部研究補助費収入	200,000	200,000	0	給与手当支出	1,800,000	1,871,800	△71,800
教育文化事業交付金収入	550,000	538,000	12,000	福利厚生費支出	300,000	319,005	△19,005
大会交付金収入	8,500,000	8,500,000	0	酒費支出	172,000	137,091	34,909
支部事務費収入	300,000	300,000	0	印刷費支出	100,000	92,878	7,122
支部事務経費収入	1,858,000	1,858,000	0	消耗品費支出	80,000	122,413	△42,413
				雑費支出	498,000	432,880	65,120
				事務経費支出	2,893,000	2,488,088	4,044,912
				経費負担支出	0	2,380	△2,380
事業活動収入計	58,508,000	57,820,836	687,164	事業活動支出計	60,674,000	54,452,531	6,221,469
II 投資活動収支の部				II 投資活動収支の部			
1 投資活動収入				2 投資活動支出			
(1) 特定資産取得収入	(470,000)	(270,000)	(200,000)	(1) 特定資産取得支出	(60,000)	(60,000)	(0)
特定資産取得収入	(470,000)	(270,000)	(200,000)	特定資産取得支出	(60,000)	(60,000)	(0)
学術振興基金引当資産取得収入	470,000	270,000	200,000	退職給付引当資産取得支出	60,000	60,000	0
学術振興基金引当資産取得収入	0	0	0				
投資活動収入計	470,000	270,000	200,000	投資活動支出計	60,000	60,000	0
III 財務活動収支の部				III 財務活動収支の部			
1 財務活動収入				2 財務活動支出			
財務活動収入計	0	0	0	財務活動支出計	0	0	0
				IV 予備費支出	12,000	0	12,000
収入合計 I～III	58,978,000	57,890,836	2,087,164	支出合計 I～IV	60,748,000	54,512,531	6,235,469
当期収支差額	△770,000	3,378,305	△4,148,305				
前期繰越収支差額	1,430,000	1,930,000	△500,000				
次期繰越収支差額	660,000	5,308,305	△4,648,305				

監査報告

2013年度における一般社団法人日本建築学会北海道支部の業務及び経理を監査の結果、業務は適法であり、収入支出とも適正なものと認める。

2014年4月23日

支部監事 _____

支部監事 _____

Ⅲ 2014 年度事業計画方針案

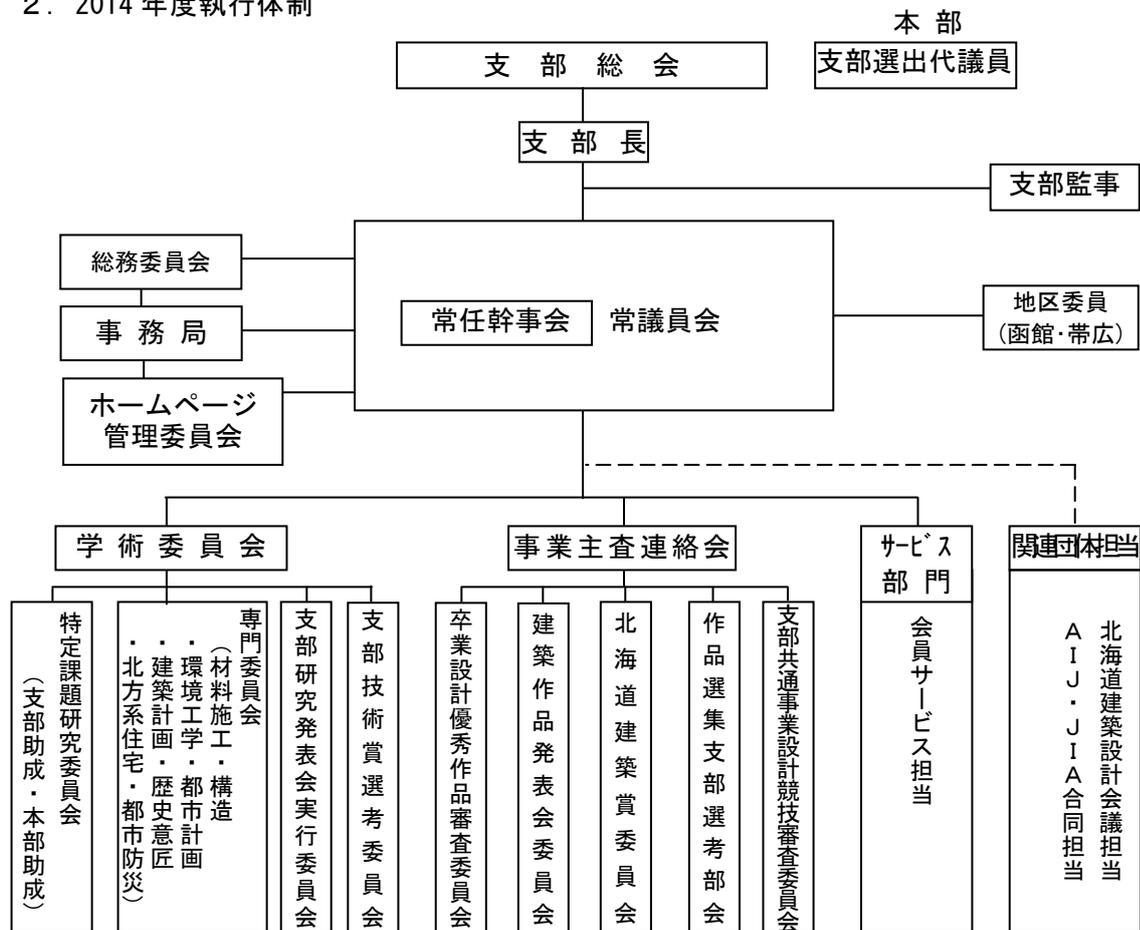
1. 活動方針

2014 年は支部長交代の時期であり、新たな体制で事業展開がなされる予定である。昨年からの引き継ぎ事項として「支部活動の活性化と透明化」に加え、「若手会員および企業会員の増加」はここ数年の課題である。その具体策が支部構造委員会から提案されている。支部研究発表会における企業パネル展示の試行である。これを他の研究部門にも拡大実施を検討する。

北海道地域においては日本建築学会（北海道支部）の存在感は、各種褒賞や研究集会・シンポジウム等の興業公告等を通して一定の地位を確保している。より一層のプレゼンスを訴える機会として恒例となっている建築作品発表会がある。北海道に建つ優れた建築物の紹介を通して、建築の見方・愉しみ方・実際に自宅を計画する際の貴重な情報源として、一般住民に開放する方途を検討する。研究発表会もそれに準じるポテンシャルを持っているので、一般公開を企図した研究発表会のあり方を検討する。

これまでは北海道は「酷寒の地」という特殊性を武器に、芸術・研究・監理施工の技術文化を全国へ発信してきた。しかし今や、その特殊性のみで勝負する時代ではない。全国の中の 1 地域として全国的発言をしていくべき立場にある。そしてその空気は徐々に伝わりつつある。この 2 年間、地域 VS. 東京の図式で地方からの格差を訴えてきた。たとえば、①各種シンポジウムや勉強会が東京中心で開催されるため、地方会員は出席機会が限られていること、②支部財源が逼迫しており安定かつ継続的支部運営に影響が出始めていること等々）を発話し、本部役員会議の懇談俎上に乗せてもらい、そして活発な議論と共に極めて前向きで有効な解を提示頂いた（たとえば、①の問題については U-Stream 配信による距離のハンディキャップ解消、②については本部からの支部費配分額の初の見直し等々）。日本建築学会は会員の声を極めてオープンに汲み取ってもらえる学会であること、またその手法が極めて柔軟かつ公正であるということ、そしてその執行に執行部は些かのためらいもないということ。このことを痛感すると同時に、今後の本部の継続的スタンスとして期待したい。そうであれば北海道支部としても、北海道という特殊意見としての苦情ではなく、全国共通に至る地域からの発信として自信を持って学会全体に貢献できるはずであり、これをもって方針案とする。

2. 2014 年度執行体制



日本建築学会北海道支部組織構成図

支部長(2014.6.1~2016.5.31)

佐藤 孝君 北海道科学大学教授

新任常議員(2014.6.1~2016.5.31)

石丸 修二君 (株)北海道日建設計構造設計室
※岡崎太一郎君 北海道大学准教授
小西 彦仁君 (有)ヒココニシ設計事務所代表取締役
菅沼 秀樹君 (株)アトリエブランク取締役設計部長
※谷口 尚弘君 北海道科学大学教授
山本 悦徳君 北海道札幌工業高校教諭
吉田 栄一君 大成建設(株)札幌支店作業所長

支部長及び新任常議員は、支部役員選挙開票(2014年4月8日)により決定した。
支部役員選挙管理委員は次の通りであった。(☆印 委員長)
☆白井 和貴君, 海藤 裕司君, 清水 浩史君, 千葉 隆弘君, 最上 公一君

留任常議員(2013.6.1~2015.5.31)

遠藤謙一良君 (株)遠藤建築アトリエ代表取締役
清水 浩史君 (地独)北海道立総合研究機構建築研究本部
北方建築総合研究所企画調整部企画課長
※白井 和貴君 北海道大学准教授
高松 圭君 伊藤組土建(株)設計部構造設計課長
千葉 隆弘君 北海道科学大学准教授
※戸松 誠君 (地独)北海道立総合研究機構建築研究本部
北方建築総合研究所居住科学部居住科学グループ主査
札幌市立大学准教授
山田 良君
(※印 常任幹事)

新任代議員 (2014.4.1~2016.3.31)

大柳 佳紀君 北方型住宅 ECO 推進協議会事務局長
本井 和彦君 (株)竹中工務店北海道支店設計部設計グループ副部長
(2014年3月の本部選挙の結果、上記2名が選出された)

留任代議員 (2013.4.1~2015.3.31)

伊東 敏幸君 北海道科学大学教授
角 幸博君 北海道大学名誉教授

新任支部監事 (2014.6.1~2016.5.31)

加藤 誠君 (株)アトリエブランク専務取締役
(2014年4月の支部常議員会で選出された)

留任支部監事 (2013.6.1~2015.5.31)

星野 政幸君 北海道科学大学名誉教授

地区委員 (2014.6.1~2016.5.31)

帯広地区委員 小野寺 一彦君 設計工房アーバンハウス主宰
函館地区委員 山本 真也君 函館市教育委員会教育長

3. 支部運営の諸会合の開催

- ◆ 総会
期日 2014年5月16日(金)
会場 北海道建設会館
- ◆ 常議員会 (複数回)
- ◆ 常任幹事会 (複数回)
- ◆ 選挙管理委員会 (支部役員選挙時に開催する)

4. 学術系委員会

4. 1 学術委員会 (主査：齊藤 雅也君, 委員数：14名, 委員会開催予定数：4回)

本委員会は、本部学術推進委員会の情報を各専門委員会および研究委員会に報告するとともに、各専門委員会・研究委員会から企画および活動の報告を受け、各委員会の活動の横断的な連携をはかる。また、支部長諮問事項についての検討、支部研究発表会実行委員会の企画の審議と承認、特色ある支部活動企画の申請、特定課題研究(本部・支部助成)の推薦、建築文化週間事業および北海道支部技術賞の募集と選考を行う。

第1回：本部学術推進委員会報告。支部研究発表会の予定。専門・研究委員会活動報告。特定課題研究・建築文化週間企画の募集。

第2回：支部研究発表会の募集要項。専門・研究委員会活動報告。特定課題研究・建築文化週間企画の承認。支部技術賞の募集

第3回：本部学術推進委員会報告。支部研究発表会の企画、専門・研究委員会活動報告。支部技術賞の選考。

第4回：支部研究発表会特別企画の決定。専門・研究委員会活動報告。特定課題研究・建築文化週間の結果報告。支部技術賞選考委員会による技術賞の受賞候補者の選出。

4. 2 専門委員会

◆材料施工専門委員会 (主査：長谷川拓哉君, 委員数：22名, 委員会開催予定数：6回)

建築の材料・施工に関する情報や意見の交換のほか、支部長から諮問される事項の検討、本部との情報交流や諮問事項の検討、最新の施行現場や特色のある建築物や工事現場の見学会、本部主催講習会への協力や北海道に関連する材料施工部門の研究委員会活動を行う。

具体的な活動予定は以下のとおりである。

- ・ 本部および支部各種委員会報告と諮問事項の審議
- ・ 勉強会(話題提供)
- ・ 見学会の開催

◆構造専門委員会(主査：溝口 光男君, 委員数：19名, 委員会開催数：4回)

各種行事を企画して道内における構造分野の研究者・技術者との情報交換を行い、構造に関する研究調査を推進する。主な活動予定は次のとおりである。

- 1) 構成委員数：19名
- 2) 委員会の開催予定：4回行う(6月, 9月, 12月, 3月)。必要に応じて通信会議を開く。
- 3) 講演会・講習会：1回(随時)行う。
- 4) 見学会：建築物(施工中も含む)等を対象に2回程度(随時)行う。
- 5) 勉強会：委員会開催時に、幅広い分野を対象に適宜行う。
- 6) 研究調査推進のための行動計画の検討(6月)と実施(7月以降)
- 7) 工業高校巡回講演会の講師推薦

◆環境工学専門委員会（主査：森 太郎君，委員数：14名，委員会開催予定数：4回）

2014年度は以下の活動を予定している。

- 1) 学位を取得した若手研究者の研究発表の機会を設け、最新の研究動向を把握する。
- 2) 環境建築、最新の設備技術を駆使している建築の見学会を実施する。北方系住宅専門委員会と連携して共催による見学会を実施する。
- 3) 「第9回環境工学系・卒業論文発表会 EGGs' 14（会場：未定）」の開催を支援する。
- 4) 空気調和・衛生工学会北海道支部主催 地区講演会ほか、本委員会の関係組織が主催する講演会、セミナー等を支援する。

◆建築計画専門委員会（主査：森 傑君，委員数：13，委員会開催予定数：複数回）

本年度は、精力的な学術活動および社会貢献活動を展開すべく、専門委員会の基本的意義である北海道の建築計画（学）分野にかかわる学会員の相互交流の場として、本委員会のさらなる活性化を目指す。具体的には、(1)委員各々の取り組みを勉強会形式により相互に紹介、建築計画（学）に関わる様々な課題や問題についての情報を共有する、(2)勉強会を発展させるようなかたちで、特定のテーマに絞ったミニシンポジウムを開催し、課題認識を深める、(3)今日の北海道において取り組むべき建築計画（学）に関わるテーマを具体的かつ体系的に整理し、特色ある支部活動として企画・実施する、(4)昨年度に設置した「30年後の北海道の生活と住まいWG」を中心として年度内での書籍出版を実現する、に取り組む。

◆都市計画専門委員会（主査：坂井 文君，委員数：14名，委員会開催予定数：6回）

2014年度の委員会の活動については、継続的に行っている情報発信と人材育成に関わる活動を中心に計画する。情報発信に関しては、市民のまちづくりに対する意識の啓蒙と知見を広げるために、7月にシンポジウムの開催を計画している。11,12,13年度の地下歩行空間や開発のすすむ創成川東地区のまちづくりのあり方、また路面電車ループ化によるまちづくりに関わるシンポジウムの際の経験を踏まえ、活発な議論とより多くの市民の参加となるような企画を目指している。人材育成については、都市計画を遂行する人材の育成に向けて、現場と技術と理論を並行して理解するための勉強会などの開催を計画している。具体的には、北海道の地方都市の地域主権によるまちづくりの取り組みのうち特に、産業・観光振興に連動した景観まちづくりやコンパクトシティにむけた交通計画について勉強会を11,12,13年度に引き続き行う。

◆歴史意匠専門委員会（主査：羽深 久夫君，委員数：16名，委員会開催予定数：4回）

道内各地域の歴史的建造物の現状を把握することに努め、保存・活用等に関して委員相互の情報交換を行ない、必要に応じて学会として社会や住民に貢献する体制を準備する。

- ①2014年度の建築文化週間事業として歴史的建造物の見学「建築散歩～函館編」（10/11）を実施する。
- ②北海道内の文化財建造については、WGで検討を行い、リストづくり、パトロール、カルテ・報告書づくり、修理工事等の予算要求を行うシステムづくりと、実施体制やヘリテイジマネージャー養成体制を整備する。
- ③札幌市以外での委員会開催と地域の歴史的建造物の見学を行う。

◆北方系住宅専門委員会（主査：谷口 尚弘君，委員数：13名，委員会開催予定数：4回）

新たな地域住宅像形成に向けた取り組みについて検討を進めるため、年4回の委員会を開催する。

- 1)2013年度継続で「北海道の住まいの歩み」について、報告書等にまとめるための協議を実施する。
- 2)北海道の集合住宅に関わる勉強会を実施する。
- 3)新たな地域住宅像の検討に向けて住宅見学会・意見交換会を実施する。
- 4)住宅ストックの持続的活用による北海道の住文化の形成に資するために、「三角屋根コンクリートブロック住宅の持続可能住居について」の研究を継続して実施する。

◆都市防災専門委員会（主査：戸松 誠君，委員数：20名，委員会開催予定数2回）

・活動方針

委員相互の連携，防災関係機関との連携，他学協会との連携，地域との連携を強化するとともに，次の世代を担う若い人を育てていくための「防災教育の充実」を進める。

・主な活動事業

- 1) 建築文化週間事業「地震防災体験学習」への支援（10月頃を予定）。
- 2) 構造専門委員会等との共催による見学会、講習会の実施。
- 3) 災害時の北海道支部緊急連絡体制の整備と充実。
- 4) 各種防災イベントへの協力

4. 3 特定課題研究委員会

(2013年度より)

◆寒冷地におけるフライアッシュの有効利用研究委員会（主査：深瀬 孝之君，委員数：16名，委員会開催予定数：複数回）

フライアッシュの利用状況などに関するアンケート調査（2014年1月実施）から、フライアッシュの有効利用に対する課題を整理し、その課題解決に向けた検討を行う。また、フライアッシュコンクリートの設計、製造および施工段階で必要となる技術資料を取り纏め、利用促進に向けた環境整備を図る。なお、委員会の活動成果は、北海道支部研究発表会や日本建築学会大会で報告する予定である。

4. 4 本部からの支部助成金による研究委員会

(2013年度より)

◆建築史意匠研究委員会（主査：羽深 久夫君，委員数：15名，委員会開催予定数：複数回）

「北海道における戦後建築の変遷とその特徴に関する基礎的研究」をテーマとして、戦後の北海道で建設された建築の変遷とその特徴を把握するため、各地に遺存する当該建築の残存状況を悉皆的に調査し、今後の調査・分析の基礎データを構築するため2年目の調査研究を行う。

『北海道の建築 1863-1974』（丸善、1974）掲載作品178件（写真付物件）、『北方建築』1957年から1960年までの掲載作品50件の計228件を収録したリストに基づいて、未調査の当該建築の現存・非現存の確認調査を行う。

4. 5 特色ある支部活動

なし

5. 支部研究発表会

5. 1 支部研究発表会実行委員会（主査：森 太郎君，幹事：桑原 浩平君，岡本 浩一君，実行委員会委員数：16，委員会開催予定回数：4回）

支部研究発表会実行委員会は支部研究発表会の企画・運営を目的とし、下記を実施する。

- 1) 支部研究発表会の日程と会場の決定
- 2) 支部研究発表会の論文原稿種別、発表形式の決定
- 3) 論文執筆要領の作成と論文原稿の募集
- 4) 会長講演会および特別企画の実施
- 5) 論文原稿の受付および編集作業の実施、研究発表会プログラムの作成
- 6) 支部研究報告集（冊子およびCD-ROM）の作成および発行
- 7) 支部研究発表会の実施
- 8) 優秀講演奨励賞の選定・授与

5. 2 支部研究発表会の実施

第 87 回北海道支部研究発表会

日時：2014 年 6 月 28 日（土）一般研究発表会、吉野博建築学会会長講演会

場所：釧路工業高等専門学校

懇親会：講演会終了後に釧路市内で実施

原稿提出締切：2014 年 4 月 17 日（木）17:00（電子投稿受付）

発表登録システム HP：

http://olive-sg.eng.hokudai.ac.jp/aij/entry/thesis_entry.php

支部研究報告集（冊子および CD-ROM）No. 87 を発行

6. 表彰

6. 1 北海道建築賞（主査：小篠 隆生君，委員数：7 名，委員会開催予定数：複数回）

（1）賞の概要

建築作品を支える「先進性」、「規範性」、「洗練度」の 3 つの視点から現地視察、議論を通して選考し、北海道建築賞の表彰と受賞者による記念講演を行い、北海道における建築創作活動の一層の促進を図る。

（2）北海道建築賞委員会の実施

上記の方針に基づき、以下のスケジュールによって委員会を実施する。

1) 第 39 回北海道建築賞の応募期間：2014 年 4 月 15 日（火）～5 月 15 日（木）

2) 審査期間：5 月上旬（応募状況確認および応募推薦作品の選定）～6 月中旬（書類審査）～7・8 月（現地審査）～9 月上旬（最終選考）

3) 結果発表：9 月下旬

4) 北海道建築賞表彰式および受賞記念講演会：10 月 24 日（金）予定

6. 2 卒業設計優秀作品（日本建築学会北海道支部賞）（主査：菅原 秀見君，委員数：6 名，委員会開催予定数：1 回）

（1）賞の概要

大学・短大・高専・専門学校・工高の卒業設計優秀作品の表彰を行い、北海道地域の文化、建築教育の向上を図る。

（2）卒業設計優秀作品審査委員会の実施

2014 年度卒業設計優秀作品審査委員会においては、2013 年度と同様、2014 年度卒業設計作品について優秀作品審査委員会を実施し、表彰の目的、審査の考え方を確認した上で「大学」「短大・高専・専門学校」「工業高校」の部門別に金、銀、銅の各賞を選考する。また、講評の論点を確認し、各選考作品の講評を行う。

6. 3 卒業優秀学生・生徒（日本建築学会北海道支部賞）

大学・短大・高専・工高の優秀学生・生徒の表彰を行い、北海道地域の文化、建築教育の向上を図る。

6. 4 日本建築学会北海道支部功労賞

当支部の維持・発展にとって功績・功労のあった支部に所属する会員、または所属した会員に対して、支部としての感謝の意を表するとともに、支部活動の活性化と意識の高揚を図ることを目的とし、表彰を実施する。

6. 5 日本建築学会北海道支部技術賞

北海道支部技術賞は、地域性に関わって、創造性豊かな建築・都市に関する新技術を表彰することにより、北海道における建築界の技術の向上に資することを目的とし、表彰を実施する。

7. 北海道建築作品発表会

7. 1 北海道建築作品発表会委員会（主査：米田 浩志君，委員数：3名，実行委員数：10名，委員会開催数：5回（実行委員会4回を含む））

2014年度は、建築作品発表会が第34回を迎える。昨年に引き続き充実した発表の場にしたい。また、発表会の後半に企画しているフォーラムを発展させながら、さらに活発な議論が生じるような場を検討して行きたい。建築作品発表会の過去三十数年は北海道建築の質の向上に積極的に寄与してきた。その歴史的事実を再確認しながら、今後の発表会への橋渡しをすべく34年目の発表会用プログラムを検討していきたい。尚、例年通り建築作品発表会作品集を発行する予定である。

7. 2 北海道建築作品発表会の実施予定

作品登録締め切り：9月中旬から下旬

作品集原稿締め切り：10月上旬から中旬

作品発表会開催時期：11月下旬から12月上旬

作品発表会開催場所：北海道立近代美術館講堂（予定）

8. 特別委員会

8. 1 事業主査連絡会（事業系5委員会の主査および事業主査連絡会担当常議員，予定開催数：複数回）

事業系5委員会について、事業の進捗状況ならびに事業を進める上での問題点等を適宜把握する。これを通じて、意思決定機関である常議員会へ改善や展開の提案等をおこなう。また、この役割を今後も果たすために必要な活動を推進する。さらに、事業系5委員会が連携しながら事業全体の活性化を計る可能性についても検討を継続する。

8. 2 総務委員会（委員長：小澤 丈夫君，委員数：5名，委員会開催予定数1回）

本委員会の目的である北海道支部事務局運営の健全性を維持するために、適宜委員会を開催し、財務管理・事務局業務管理について検討する。昨今の経済状況により、支部の財政状況がさらに困難さを増していることから、各事業に対して早めの詳細予算策定および事業終了後の決算報告についての提出を厳格にして、見通しのある財務管理を進める予定である。さらに事務局業務の効率化、日本建築家協会北海道支部との合同企画についても検討を行う。

8. 3 ホームページ管理委員会（主査：斉藤 雅也君，委員数：3名，委員会開催予定数：複数回）

平成26年度は主に以下の事項について実施する予定である。

- 1) 委員長を交代する。
- 2) 常議員会、事務局等の要請に応じて適宜、ホームページの更新作業を行なう。
- 3) 本部の情報化推進に併せて、支部ホームページが貢献することが期待できる活動を積極的に行なう。

9. 講習会・シンポジウム等の開催

本部主催による講習会・講演会のほか、地域の要請にこたえる各種の講演・講習会を、工業高校・自治体及び関連諸団体等の協力を得て複数の地域で企画実施する。

9. 1 本部主催講習会

2014年度本部主催支部共通事業、委員会主催講習会を開催する。

9. 2 講演会

各専門委員会等の主催により、自治体、関係諸団体等の協力を得て企画実施する。

9. 3 展示会

支部卒業設計優秀作品を学会支部ホームページにて公開する。また、全国大学・高専卒業設計優秀作品巡回展ならびに道内工高卒業設計優秀作品巡回展を実施する。

9. 4 見学会

各専門委員会等の主催により、自治体、関係諸団体等の協力を得て企画実施する。

10. 本部関連事業・その他

10. 1 2014年度支部共通事業設計競技の実施（主査：川人 洋志君，委員数：5名，委員会開催予定数：1回）

2014年度設計競技審査委員会は、主査、川人洋志、委員、赤坂真一郎、小西彦仁、山田良、山内裕一の5名で行う予定である。

2014年度の課題は「建築のいのち」と決定され、7月中に支部審査を1回行う予定である。

2013年度の応募総数は、12案で、前回応募作品数の1.5倍と増加したものの、他支部に比して少ない状況は変わっていない。とはいえ、近年は、道外からの応募もあり、応募数の増加が見込まれる予感はある。今後の活況を期し今年度に続いて審査委員会構成メンバーと連携を図り道内大学学生に参加の呼びかけを行いたい。

10. 2 作品選集支部選考部会（主査：加藤 誠君，委員数：6名，委員会開催予定数：2回及び現地審査）

2013年度の実績は7作品であり、2012年度の実績と同じであった。そのうち住宅の実績が2作品にとどまったが、非住宅全道各地から幅広い応募が見られた。応募者は、これまでも応募経験のある、いわゆる組織設計事務所に属する設計者が多い。2014年度以降、住宅など小規模建築の実績、また、幅広い会員層に対してより積極的に応募を求めよう呼かけていきたい。また、支部による現地審査は、作品選集の全審査工程において重要な役割をもつと考える。今後も引き続き、できる限り多くの委員が多くの現地審査を行えるようにしていきたい。

10. 3 建築文化週間

グループセミナーなどを通して地域との研究交流を深め、また建築文化週間などの文化事業を通じて、開かれた学会として社会に対する文化活動の推進を図る。本年度予定している文化

関連事業は、以下の 3 件を予定している。

1. 地震防災体験学習・・・地域で進める防災対策・・・ (都市防災専門委員会)
2. 函館の歴史的建造物の見学「建築探訪～函館市」 (歴史意匠専門委員会)
3. 「第 39 回北海道建築賞表彰式・記念講演会」 (支部主催)

1 1. 建築関連団体との活動

1 1. 1 AIJ-JIA 合同委員会 (委員数(AIJ) : 常任 8 名, 委員会開催予定数 : 1 回)

日本建築家協会北海道支部(JIA)と合同委員会を開催し、両団体の活動についての情報交換および合同企画について協議する。ジョイントセミナーについては、継続して行うように計画を進める。

1 1. 2 北海道建築設計会議

10 団体により構成されている本会議は、建築確認制度や建築士制度など、主に建築業界に共有の課題について、引き続き情報交換や意見交換をおこなう予定である。

IV 2014年度収支予算案

科 目	2014年度予算額	2013年度予算額	前年差比 (増 減)
I. 一般正味財産増減の部			
I. 一般会計からの振替額			
本部からの交付金	6,524,000	15,385,000	(▲8,861,000)
本部費	1,423,000	1,377,000	46,000
経費助成費	1,890,000	1,830,000	60,000
事業転進費	300,000	750,000	▲450,000
支部研究補助費	200,000	200,000	-
建築文化事業費	510,000	550,000	▲40,000
大会交付金	-	8,500,000	▲8,500,000
支部事務費	300,000	300,000	-
支部会議費	1,871,000	1,838,000	33,000
Σ	6,524,000	15,385,000	▲8,861,000
II. 経常増減の部			
【経常収益】			
実施事業会計	(175,000)	(175,000)	(0)
表彰・顕彰事業	(175,000)	(175,000)	(0)
表彰関係事業	175,000	175,000	-
その他事業会計	(2,230,000)	(3,840,000)	(▲1,610,000)
研究集会事業	(2,230,000)	(3,840,000)	(▲1,610,000)
支部研究発表会	890,000	890,000	100,000
建築作品発表会	1,250,000	1,250,000	-
大会事業	-	41,710,000	▲41,710,000
法人会計	(120,000)	(120,000)	(0)
特定資産運用益	(5,000)	(5,000)	(0)
特定資産運用益	5,000	5,000	-
繰り越	(121,000)	(121,000)	(0)
受取利息	1,000	1,000	-
雑収益その他	120,000	120,000	-
Σ	2,531,000	44,141,000	▲41,610,000
【経常費用】			
実施事業会計	(1,930,000)	(2,520,000)	(▲590,000)
調査研究事業	(740,000)	(1,370,000)	(▲630,000)
調査研究事業	740,000	1,370,000	▲630,000
表彰・顕彰事業	(780,000)	(780,000)	(0)
表彰関係事業	720,000	720,000	-
設計競技事業	40,000	40,000	-
社会対応事業	(430,000)	(390,000)	(40,000)
文化事業費	400,000	380,000	40,000
展示事業費	30,000	30,000	-
その他事業会計	(2,230,000)	(52,340,000)	(▲50,110,000)
研究集会事業	(2,230,000)	(52,340,000)	(▲50,110,000)
支部研究発表会	890,000	890,000	100,000
建築作品発表会	1,250,000	1,250,000	-
大会事業費	-	50,210,000	▲50,210,000
法人会計	(5,893,000)	(5,874,000)	(19,000)
支部運営	(244,000)	(244,000)	(0)
総会	200,000	200,000	-
常議員会	40,000	40,000	-
その他運営費	4,000	4,000	-
事務運営	(5,849,000)	(5,830,000)	(19,000)
給与手当	1,800,000	1,800,000	-
退職給付引当金繰入	80,000	80,000	-
法定福利厚生費	300,000	300,000	-
通勤手当	165,000	165,000	-
旅費・交通費	30,000	30,000	-
通信・印刷費	172,000	172,000	-
娯楽・雑費	30,000	30,000	-
消耗品費	90,000	90,000	-
印刷費	100,000	100,000	-
地代・家賃	2,024,000	1,938,000	86,000
水道光熱費	848,000	890,000	▲42,000
雑費その他	230,000	230,000	-
Σ	10,053,000	60,735,000	▲50,681,000
当期経常増減額 (A) + (B) - (C)	-998,000	-1,228,000	230,000
当期一般正味財産増減額	-998,000	-1,228,000	230,000
一般正味財産期首残高	12,878,000	10,012,150	2,865,850
一般正味財産期末残高	11,880,000	8,784,150	3,095,850
指定正味財産期末残高	-	-	-
正味財産期末残高	11,880,000	8,784,150	3,095,850

注) 一般正味財産期首残高の数値は、支部役員会および日本建築学会臨時総会(2014年3月18日)で承認を受けた予算案による。2013年度決算確定による正式な2014年度一般正味財産期首残高は、決算書の通り13,120,455円である

基金・積立金内訳

2013年度末(決算)		2014年度末(予算)	
支部基金	2,810,000	支部基金	2,810,000
災害調査研究基金	1,900,000	災害調査研究基金	1,900,000
学術振興基金	2,540,000	学術振興基金	4,950,000
職員退職積立金	780,000	職員退職積立金	840,000

北海道支部地域法人正会員・賛助会員名簿

2014年3月末現在

◆法人正会員

会員番号	口数	会員社名・団体名	会員番号	口数	会員社名・団体名
00503-64	1	伊藤組土建(株)	00547-58	1	戸田建設(株)札幌支店
00505-34	2	岩倉建設(株)	00553-56	1	(株)巴コーポレーション
00505-50	2	岩田地崎建設(株)	00557-04	1	日鐵セメント(株)
00515-72	1	(株)岡田設計	00614-45	1	日本データサービス(株)
00729-26	1	亀田工業(株)	00560-51	1	(株)日本設計札幌支社
00517-00	5	鹿島建設(株)	00561-82	1	日本防水総業
00614-38	1	(株)ホーム企画センター 総務部	00573-66	1	(株)三菱地所設計
00523-82	2	(株)熊谷組	00625-81	1	(株)アトリエ・アク
00568-23	2	(株)北海道日建設計	00586-89	1	北農設計センター
00571-46	3	丸彦渡辺建設(株)	00597-74	1	(株)総研設計
00540-41	5	大成建設(株)札幌支店	00616-32	1	(株)北方住文化研究所
00575-10	1	宮坂建設工業(株)	00568-07	1	(株)ドーコン
00544-49	2	(株)竹中工務店	00618-60	1	北海道建築設計監理 (株)
00674-76	1	(株)安藤・間札幌支店	00568-15	2	北海道コンクリート 工業
00674-84	1	五洋建設(株) 札幌支店	00531-84	1	清水建設(株)北海道支店
00549-52	1	東急建設(株) 札幌支店	00538-83	2	(株)田中組
00710-77	1	(株)久米設計札幌支社	00674-50	1	(株)中原建築設計 事務所
00684-22	1	(株)北海道サンキット	00684-14	1	(株)三暁プレコン システム
00708-51	2	北海道旅客鉄道(株)	00685-29	1	(株)北海道不二サッシ
00725-28	1	(株)コバエンジニア	00704-45	1	(株)アトリエ・ブंक
00725-36	1	(有)北欧住宅研究所	00704-09	2	(一財)北海道建築指導 センター
00721-70	1	(株)土屋ホーム			

◆賛助会員

会員番号	口数	会員社名・団体名
00814-70	3	北海道電力(株)
00810-06	1	道都大学附属図書情報館
00815-01	1	北海学園大学附属 図書館
00815-19	1	札幌建築デザイン専門学校
00847-03	1	(株)総合資格



一般社団法人 日本建築学会北海道支部

〒060-0004 札幌市中央区北4条西3丁目1
北海道建設会館 6階

TEL.011-219-0702 FAX.011-219-0765

E-mail: aij-hkd@themis.ocn.ne.jp

<http://news-sv.aij.or.jp/hokkaido/>